

おとん、  
危機一髪！



## 知らなかった危機

---

大きくなってから母親から聞いた話だが、母親は私を妊娠中、具合が良くなかったらしく、医者からは「この子はあきらめてください」と言われていたそうだ。無理をすれば母体が危ない、そして例え、子供が生まれたとしても長くは生きられないとも言われていたようだ。

・・・という話を何十回も母親から聞いている。ちなみに私の母親は、同じことを何回も言うというシステムを約30年前から導入しているようで、特にここ2、3年かなりのシステムアップを行ったようで、1回の電話で同じことを何回も言う。しかも、ワンサイクルが10分くらいなので同じ話を軽く2、3回するので、30分は同じ話ということになる。いくら出来の悪い息子でも暗記してしまう。本人は同じ話を何回もしているということに気づいていない点が始末が悪い。同じ話を何回も聞かされた後、電話を切ったとしても、必ず、本当に必ず「言い忘れたことがある」と電話がかかってくる。そしてヘタすると又同じ話をするので、受話器の耳の部分から離し、10秒に1回の間隔で「うん」とか「スン」と合いの手だけを入れておくと会話が成立してしまうのが不思議な感覚だ。

10秒に1回の合いの手は、長年の経験からあみだした数値だ。15秒も空けると「ちょっと、聞いてんの？」と説教が始まるので注意が必要だ。ちなみにその注意も何回も聞く羽目になるので気が抜けない。

・・・と言う話はここでは関係ないが、もしかすると、私はこの世に生まれなかったかもしれない、例え同じことを何回も言う母親でも生んでもらったことに感謝し、これから親孝行をしていきたいと思っている。

生まれる前にそんな危機があったとは全く知らず、この世に生まれただけでもラッキーだが、この世に生まれたお陰で色々な体験が出来た。まだ死んでいないのでこれからも体験していきましょう。楽しかったこと、恐ろしかったこと、驚いたことなどなどをここに記録として残していきたいと思っています。

文字校正も面倒なのであまりやりません。誤字脱字も多いかと思いますが、気にしないで下さい。私も気にしないようにします。

## ちょっとした危機

---

例え生まれたとしても長生きが出来ないと言われながら、無事、この世に生まれたものの私は案の定、生まれて早々「この子は歩けません」と医者に言われたらしい。そう医者に言われると親としても何とかしなければいけないと、マッサージに通ったり、ギプスのようなものを装着させたり色々と苦労したらしい。結局何の問題もなく歩けたわけだが、最初の子供なのでかなり慎重に対応してもらい感謝している。何回も同じことを話すことはこの際、忘れよう。

すっぽりと、

---

小学生低学年の時だ。近所の小学生らと虫捕りをしていた。その当時は山を切り開き、宅地開発が多く行われており、私の自宅付近も例外ではなかった。その造成地と山の境あたりの木に「カナブン」がいるということで皆でその場所に向かった。

その場所は小学生には危険な場所であった。崖の上に木があり、その木の先にカナブンがとまっていた。私はそのカナブンを捕まえようと網を伸ばした。覚えているのはそこまで。崖から落ちて気を失っていた。正確には気を失ったために崖から落ちたのだ。何故気を失ったのかは？だが・・・虫捕りをしたいがために具合が悪かったのを隠して遊んでいた事を覚えている。

その崖は垂直で結構な高さがあり、下には大きな石が転がっていたが、たまたま造成地用の「U字溝」が置いてあり、その中に「すっぽりと」はまり、おまけに落ちた頭の部分には、空き缶が転がっており、丁度「まくら」のようになり頭を強く打たなかったこと、すっぽりとU字溝にはまり、腰を強打しなかったことなどが重なり、全く無傷ですんだ。その時、私を助けてくれた近所の人も医者も奇跡と言っていたのが印象的だった。

## おじいちゃんの肩車

---

私は高所恐怖症です。なぜそうなったのか、ずいぶんと前に考えてみたところ、これだと言う理由がみつかった。あれは忘れもしない3歳だったか、4歳だったか、場所がどこだったか、全く覚えていないのですが、ものすごく高い崖の上に私はいた。数十メートル下は海だ。船越さんが現れそうな立派な崖だ。今だったら間違いなく「転落防止柵」が設置されていると思うが、その当時は、例えそこから落ちて死んだとしても「落ちた奴が悪い」と正しく判断された時代だ。

ただでさえ恐怖を感じる崖っぷちで、私はお爺ちゃんに肩車されていた。お爺ちゃんは、私を肩車したまま崖の下を覗き込んだのだ、そのときの恐怖は今でも忘れられない。へたに暴れるとお爺ちゃんが体制を崩し、2人もろとも転落死ということにもなりかねない。小さいながら私はここは我慢しどころだ・・・と冷静に対応しようと自分に言い聞かせ、お爺ちゃんを諭すように、崖っぷちから離れるように頼んだ。・・・ものすごく怖かった、二度と味わいたくない恐怖だった。これが私が高所恐怖症になった原因だと思う。それから約25年後、高所恐怖症のこの私が思いもよらない職業に就くことになる。

ついでに言うが、私は「閉所恐怖症」でもある、こちらは極度の・・・と付くくらい重傷だ。フルフェイスのヘルメットを被るだけでも、呼吸が苦しくなりパニック気味になる。TVで宇宙飛行士の宇宙服の姿を見るだけでも苦しくなる。あのヘルメットを被せられ他人に「キュッ」とひねられてロックさせる所が、自分一人ではヘルメットを脱ぐことも出来ないのではないかと、ものすごい恐怖を感じる。MRIの検査も数日前からシミュレーションしパニックを起こさないように訓練し、当日は目を絶対開けずに挑んだ。目を開けて目の前にスペースが無いと思った瞬間、ダメになると分かっているからだ。また、痛ましい事件ですが、マット殺人事件。いじめにあった子がマットにぐるぐる巻きにされて窒息死した事件です。思い出して文章にするだけで、息苦しくなってきました。

ちなみに、閉所恐怖症になった原因は小学生の時だ。木に小さな穴が開いており、そこにカナブンを1匹入れてみた。スコスコとそのカナブンは細い穴の奥に入っていった。もう1匹入れてみた、スコスコ入って行った。もう1匹と4、5匹入れたところで、一番最初に入れたカナブンの気持ちになってみた。戻ろうにも戻れない、後ろから別のカナブンをぞろぞろ来ているし、穴が細いので反転も出来ない。おまけに暗いし、自分ではどうしようもないと思った瞬間に、息が苦しくなりパニックになった・・・それからのように思います

今気づいたが、私の話には良く「カナブン」が出てくる。何かあるのだろうか？一般的に太った人のことを「豚みたい」と言うが、私は「カナブンみたい」と言う。首が短く肩のラインが丸くなっているところが「カナブン」そっくりだからだ。

皆さんお気づきでしょうか？タイトルと全く違う話になっていますが気にしないで下さい。私も気にしませんので・・・。

今では許されないことも、昔は寛大な心で許されていた。ゆるい時代というか余裕のある時代があった。私がまだ幼稚園にも通っていない子供の頃の話だ。母親と駅のホームで電車を待っていた。今は「JR」だが当時は「国鉄」と呼ばれていた。国の鉄道ながらそれぞれの担当職場での判断が許されていた本当の意味で責任を持った組織だったころの話だ。

私たちが乗る電車の時間まではまだかなり時間があり、前にも言ったがホームで電車を待っていた。すると雪が降ってきた。説明不足で申し訳ないが、ホームには電車が来ていた。来たいたといっても、それは別の電車だよ。それも貨物列車だよ。当然人は乗れないよ。貨物列車だから。大変申し訳ありませんが文章がへたくそです。文章が中国人っぽい単発系になっているのが自分でも良く分ります。

雪が降っているので当然寒い、母子で震えていると、貨物列車の人が「寒いから、乗って良いよ」と言ってくれた。母も私も「ホントにいいの?」といった顔でお言葉に甘えることにした。貨物列車でも比較的人が乗りやすい車両に乗せてくれた。荷物は郵便物だった記憶がある。列車は動き出し、希望の駅で降ろしてくれた。ありがとう貨物列車のおじさん。本当に停まる予定の駅だったの? いまだったらクビだろうなあ。

鉄道つながりでもうひとつ、むかしは線路に石などを並べて電車に轢かせたり、飛ばさせたりして遊んだ。10円玉や1円玉はぺっちゃんこになる。電車ってドンだけ重いんだ、あんなのに轢かれたら終わりだと、電車の恐ろしさもそれで分った。しかし、線路に物を置くにもルールがある。大きな物はダメだ。学校の先生も大きな物は置くなと言っていたし、運転手も小さいものならば「くにゅやろう〜なめんなよ」といった感じで喜んで踏みつけていたような気がする。気がするだけですが。線路に並べていると遠くから「ファン、ファン」と警笛を鳴らして向かってくる「ドケツドケツ」と言っているようだ。電車が来るぎりぎりまで並べる。勇気の証明だ。そんな事をやっても大事にはならない。大人にみつかると、どつかれるので大人が来ると走って逃げる。それだけだ。

ついでにバスだ。私の友達も遊んでいる途中で急に「うんこ」がしたくなり、道のど真ん中でうんこをした。なんで道のど真ん中か理解できないが、たまたま出るタイミングがど真ん中だったからだろう。時は昭和40年代、戦後すぐの話ではない、道路は舗装されているしバス通りだ。交通量もそれなりにある、とても「うんこ」が出来る状況ではないのは確かだ。しかし彼はそんな中でも「うんこ」をした。それでバスを止めた。バスの運転手も事の終わりを待ってくれた。クラクションも鳴らさずにだ。彼はうんこをそのままにし立ち去った。バスは「ブツ」をまたいで何も無かったかのように運行を再開した。「粹」じゃないか! 私たちの中では彼は英雄になった。「バスを止めた男」として。

もうひとつバスの話。もう遅いので短めに説明する。30年ほど前、祭日の最終便長距離乗り合いバスに乗っていた、乗客はいつの間にか私一人になっていた。外はものすごい土砂降りの雨、何故かバスはバス会社の事務所前に停まり、運転手が「ちょっと待ってて」と事務所に行った。何だろうと思っている内に運転手は戻り出発した。そして私の降りるバス停まで約30分間貸切状態で走行し、私を降ろしてすぐUターンして戻っていった。それからずいぶんと経ってから分ったのだが、そのバスは土日のみ私の降りるバス停まで運行するが、平日と祭日はバス会社止めとなっていたのだった。つまり、運転手さんは（ここから「さん」付け）外は土砂降り、最終便、アホそうな少年ということもあり、事務所に掛け合い、私だけのために、運行する義務も無いのに、往復1時間もバスを運行してくれたのだった。しかも何も言わずにだ。「粹」じゃないか！かっこいいとはこういうのことを言うのだ。ちなみにそのバス会社は、「南海白浜急行バス」調べるとこの会社はもう存在がなく、その運転手さんは運行を引き継いだ「御坊南海バス」に移動したのか定かではない。私の中の「かっこいい大人」は今でもあなたです。ありがとうございました。

## ブレーキが利かない自転車

---

皆さんの自転車はブレーキが利きますか？最近ブレーキの無い自転車も人気があるようですが、ブレーキは大切な装備です。ここではブレーキの大切さを学びます。当たり前ですが・・・

時は小学校低学年時代、その日私は、友達のを自転車を借りて遊んでいた、その自転車の弱点はブレーキが利かないこと。止まり方は、靴の先を地面に擦り付けて止まる。ちなみにその当時の私は、自分の自転車でもブレーキは何故かほとんど使わず、前述にある靴の先を地面に擦り付けて停まっていた。（こういう子供もいるためブレーキの大切さを教える必要があります。）そのため、母親からは靴が減るからブレーキを使いなさいとよく叱られていた。（靴底が減るのではなく、靴の先が減り穴があく）

つまり友達のを自転車を借りているということ以外、日常となんら変わらない状況だった。ちなみに、この自転車の所有者は「ゆるい時代」に出てくる「バスを止めた男」である。やはり大物は違う。

ブレーキの利かない友達のを自転車を駆り、いつものように颯爽と走っていたが、右カーブを曲がった瞬間、目の前に車が走ってきた、右カーブなので若干外側に膨らんでいたため右に避けることは出来ず、左側に避けた。車との正面衝突は避けられたものの左側にはかなり深い側溝があり、私は自転車もろともその深い側溝に突っ込んだ。かなりの衝撃を感じると共に気が遠くなっていった。

血の味がした。前歯が折れ、手足にかなりの擦り傷を負っていた。深い溝から自力で這い出し、血だらけになっている小学生に向かって、車の運転手は「この子供が急に飛び出してきたんや、俺は悪くない」と何回も連呼した。私は子供ながら「こんな大人にはなりたくない」とものすごく冷静に思ってそいつを見ていた。40年近く経ってもそいつの風貌を覚えている。むかし電波少年でケイコ先生と東大を目指していた「坂本ちゃん」にそっくりだった。ルックスもダメ、根性もダメなその坂本は私を置いて立ち去った。坂本は最低の大人だ。

お気づきでしょうが、そもそもブレーキの利かない自転車で飛び出した私が悪いのは間違いの無い事実だ。しかし、大人としてやるべきことがあるだろう。坂本！反省しろ！

・・・で通りがかったおばちゃんが、見かねて私の家まで付いてきてくれたが、その時、家には誰もおらず、おばちゃんは、私を自宅まで連れて行って手当てまでしてくれた。怪我をして不安だった私は、そのおばちゃんのお陰で安心できた。そのおばちゃんは近所でたまに見かける程度で特に親しい訳ではなかったが、それを機に母親も私も挨拶をする仲になったので多少おばちゃんの家事情もわかってきた、息子さんは近所でも有名は秀才。娘さんはこれまた稀に見る「美少女」（当時は中学生か？）と噂されるほど。実は以前何回かその娘さんを見掛けた事があり、キレイなおねえちゃんだと子供ながらに知っていた。

つまり結末はこうだ。「いい人は、いい人生が得られる」

きっと坂本の家庭は、息子はグレてヤクザになり、抗争に巻き込まれ顔の判別が出来無いくらいの遺体で発見され、娘は中学3年から援助交際、18歳のときに悪い男に捕まり、男の遊び金を工面するため風俗嬢となり、最後は薬物に手を出し23歳という若さでこの世を去り、妻は不細工な上、ニンニク好きの肥満体で、韓流ドラマにはまり、韓国までおっかけたのはいいものの国境を越えてしまい、北の警備隊に射殺されてしまう。そして本人は、私を置き去りにしたその夏、海水浴中にサメに襲われ海パンだけ残し消滅したに違いない。

皆さん、人に優しく、人の痛みの分る大人になるよう努力しましょう。そして、そういう大人が子供を正しく教育し、責任感のある、正しい行いが「かっこいい」と思われる社会になればと思います。神様はあなたを見ていますよ。

## 誘拐

---

こう見えても(?) 私は小さい頃、すごく可愛かった。自分でもそう思う。そんな私が幼稚園時代に体験した危機、そう可愛い子しか体験出来ない誘拐・・・

私は、友達数人と自宅から少し離れたところで遊んでいた。友人と言っても近所の子供の集まりなので、私が一番年下で私より2、3歳年上の子達と遊んでいた。私が少しみんなと離れて一人あそびをしている時だった、おじさん(50歳以上か?)が近づいてきた、そのおじさんは「子犬が行方不明になったから一緒に探しに行こう」と言って来た。何の疑いもなく、おじさんが困っているから助けてあげようと、おじさんに付いて行こうと歩き出した、すると後ろから「付いていったらダメッ」と近所のおねえちゃんが大きな声で言った。するとそのおじさんは「へへっ」と薄笑いし小走りで去って言った。明らかにそのおじさんは「くそ!」的な顔をして逃げていったので誘拐目的というか、いたずら目的の変態じじいだったに違いない。そのおねえちゃんは「知らない人についていったらダメッ」と私を叱ってくれた。親からも知らない人に付いていけない様にと言われていたが、「子犬が行方不明になった」という卑怯な作戦まで見抜けなかった。そのおねえちゃんのお陰で私は危機を脱した。子供だましの嘘をつきやがって二度と騙されないからな!

大人になってから、しかも数年前にメールで「ゴールデンレトリバーの赤ちゃんがたくさん生まれました、飼い主が見つからないと近々処分されそうです。飼い主を探してます」というメールが知人から来たので知り合いにもメールしました。おまけにに会社の朝礼でも言って会社の人達にも探してもらいました。2、3日後、TVのニュースで「新卒のチェーンメールの被害が広がっています・・・」・・・・・・・・・・やられた。

皆さん、私を騙したければ、犬系で攻めるといところです。

## スーパーサイヤ人？

---

小学2、3年生の頃だったと思う。年の頃は中学生くらいか？近所では見たことが無い「お兄ちゃん」が突然、私の前に現れた。近所というか同じ学区であれば、田舎なのでどこの誰の子供かという事は大概は分るはずだが、全くはじめて見るお兄ちゃんだった。

彼は、初対面の私に何故か「俺に触れたらお前の勝ちだ、俺に触れるか？」と言って来た。触るくらいなんとも無い、ちょっと年上というだけで舐めんなよ！ってな感じでサッと腕を出して触ろうとした、すると思ったよりも素早くかわした。「ナカナカやるな！」、俺を本気にさせやがって！アタタッと触ろうとしたが全く触れない。おかしい、こんなはずは無い。かなり素早い。アニメには詳しくないが、ドラゴンボールに出てくる強いやつが、瞬間移動するような動きと似ている。

スーパーサイヤ人とかいう人種かもしれない。

その後も触ろうとしても、驚異的な速さで全く触れそうも無い。チャンスが訪れた。ブロック塀に追い詰めた、後ろは約1.5mのブロック塀、目の前には俺がいる。俺と彼の間は1mも無い、「勝った！」躊躇無くサッと触ろうとした瞬間、彼は後ろ向きにジャンプし、ブロック塀の天辺に飛び乗った。重みでブロック塀がかなり揺れている。1.5mもあるのに（この塀は今でもあるので実測地）しかも後ろ向きにジャンプした。しかも助走無しだ。しかも履いているのは「つっかけ」と言われる履物でだ。（運動するには適していない履物、おばさんがよく履いているあれだ。）

「こいつ、人間じゃないかも」とその時から思い始めた。こうなれば、日本代表いや、人類代表としてこの目の前の生命体に負けるわけにはいかない。こっちはスーパー小学生だ（実際違うが）と自分を奮い立たせた。

塀の上を素早く走り、飛び降り、走って、私から逃げる。必死で追いかけた、そして2回目のチャンスが訪れた。高さは5mはあるほぼ垂直のコンクリート製の崖の上、崖にはガードレールがあり、奴はガードレールの外側に立っている、20センチずれれば転落する。奴はガードレールを手摺り代わりにつかみ、ひらりひらりと回転しながら私をかわしていく、こんな至近距離で触れないのは明らかにおかしい。実は知らず知らず、崖の上にいる奴のことを心配しセーブしていたかもしれない。もうこうなったら奴の心配などしない。落ちても奴のせいだ。奴が挑発したのが悪いんだ。

私は、ガードレールの外側に立つ奴を両手で囲むように、素早く腕を差し出した。一瞬奴が消えた、消えたと言うか沈んだ。落ちたようだ。「パタパタッ、パン」と音がした。あわてて崖の下を見た、奴は下でこっちを見て笑っている。「よかった、無事だ」・・・っていうか、この高

さから飛び降りて大丈夫とは。私はどうやって降りたのか聞いた。すると奴は、走って降りたと言う。パタパタという音は、奴がほぼ垂直のコンクリート面を走った音だったようだ。最後の大きな「パン」という音は着地の音だ。・・・諦めた、無理だ奴に触るのは！呆然と見つめる私に奴は満足したように去って言った。

その後、母親に奴の背格好などを説明し、どこの子供か調べてもらったが、回答はそんな子供はこの辺にはいない！だった。今では、あれは夢だったのかと自分を疑い始めている。・・・ちなみに、顔はお笑い芸人の「ハイキングウォーキングのQ太郎」に似ていた。そのとき以外、一度も奴を見かけたことが無い。

## 学校の先生

---

今学校の先生が、どうのこうのと、くだらないことがニュースになっていますが、いつも思うのは、そんなことでギャーギャー騒ぐなと言うことです。昔は何でもありだった。親も馬鹿だし、子供も馬鹿、もちろん学校の先生も馬鹿がいて当たり前だ。学校の先生だからえらいとか賢いと思うからイカンのであって、何の社会経験も無い学校の先生が、えらい訳ないでしょう？かわいそうです学校の先生。

・・・ということで、実際に私の周りにいた先生のお話です。

### ・ヤクザ先生

見てくれは「渡 哲也」いつもグラサンをかけている。角刈り、太っている、服装のセンスはチンピラ風、愛車は「ホンダカブ」。家庭訪問のときにどぶに「つっかけ」を落とし、汚い足で我家に上がってきた。教室の天井からつるすタイプの世界地図（100インチのスクリーンよりもでかく、巻き取り式のものを）を立て、生徒に動くなと指示し、世界地図を倒し生徒の頭に直撃させ、「ワシはやってない、地図が倒れただけや」と子供並の知能で責任逃れする。猟銃を持っている。「おまえら、言うこと聞けへんのやったら、撃つぞ」とよく言う。もちろん殴るのは当たり前。学校内で誰よりも言葉遣いが悪い。

「今日、先生に撃つぞ！」って言われたと、親に言っても、「あの先生猟銃持ってるからホンマに撃たれんように気いつけや」と言われる程度。そんな先生だが「こわい」から生徒は言うことを聞いていた。

### ・スネオ先生

生理的に受け付けない、爬虫類系の顔、若い女の先生に色目を使う、態度がでかい、体育の先生と仲が悪い、七三分けで細身。授業の中で「そんな中で」を1時間に何十回も言う。悪いことをしたときに、「正直に誰がやったか手を挙げろ」と言われ正直に手を挙げたら、大人パワーで思いっきり平手で殴られた。「よく正直に言った」と褒めそうな雰囲気をかもし出しながら・・・

・平気で裏切る。全般的にズルイ奴。

### ・チンピラ先生

スネオ先生の悪口をいつも生徒の前で言う。しかもあいつは嫌いだと公言している。癖が「チッ」と舌打ちすること。体育の先生なので、運動神経の悪い奴が嫌いで罵声を浴びせる、「アホか」「どんくさい」「帰れ」「お前のせいで負けた」など数々の暴言有り。よく肩が外れるのが弱点。頭部が異常に小さく「握りこぶし大」と言われている。スポーツ刈り、ギョロ目、逆三角形の体。頭部が小さいので脳みそも小さいのでは？と噂されていた。

### ・おじいちゃん先生

カレーライスライスカレーだと一歩も譲らず、生徒たちとケンカをし、それ以降先生と生徒の溝が出来た。プールの授業で、開脚をするときに、タマキンを披露していた。しかも朝礼台の上で片タマずつ丁寧に出して、「唾（つば）」を「ツワ」と発音する。昔タイプの先生で時代のギャップの犠牲者。でもなんとなく好きだった。



学生時代、俺はおんぼろの軽自動車に乗っていた。よく友達を乗せ、夜中にドライブインにメシを食べに行ったりしていた。その日は日中、暇だったので友達と二人でドライブをしていた。何の目的も無く、行き先も特に無い、何かをしようとしても何も無いし、面白くない、刺激が欲しい。あるのはこの車と俺ら二人だけ。

ひらめいた。刑事ドラマでよくあるシーンだが、刑事が逃げる犯人の車に飛び乗り、振り落とされまいと必死でつかまり、最後には犯人逮捕するという。千葉真一の十八番だ。（古い。若い人向けには西部警察をイメージしてください）これなら車と人さえあれば出来る。お金もかからず、スリルも味わえる。最高じゃないか？

担当を決めよう！この車は俺のだから俺が運転し、屋根につかまるのは友達のほうだ。なにより俺には危険が及ばないのがいい。友達が車の屋根に上る。車の屋根というのはあまり強度が無いようで、人が乗るとボコボコへこむ。多少は仕方ないので（仕方ないことも無いのだが）立つのはバツ。腹ばいになり体重を分散させることで屋根の凹みを少なくすることが出来る。両手を一杯に広げ、車の両側面を手でつかみ体をホールドできるようにする。ちなみに両足は広げるだけで特に固定は出来ないのでフリー状態だ。

友達は楽しそうな顔をしている。その顔を見て俺も楽しくなる。準備が出来たので走ってみよう。最初はゆっくりね！運転席の窓を全開にし、屋根の上の友達とコミュニケーションをとる。なんだか新鮮だ。助手席の窓も開け、屋根の上の友達が車をつかめるようにする。そうか！窓を開けてあげれば、屋根の上の人は車をつかみやすくなるということが分った。皆さんも覚えてください。

ちょっとスピードをあげようか？了解が取れたので速度を上げる。上で友達の悲鳴か歓喜の声が分からない声が聞こえる。どうやらスピードを出すと、上の人声が聞こえづらくなることも分った。皆さんも覚えてください。TVの中の刑事はこれくらいの速度では落ちない。犯人はナカナカ落ちない刑事にいらだち、車をジグザグに運転し始める。忠実に再現してみた。今度は完全に悲鳴と分る声がすごく聞こえた。どうやら、人間は本当の危険に遭遇すると、とんでも無く大きな声が出るようだ。皆さんも覚えてください。

その時だった、対向車線の車の運転手が驚いて、すれ違っても尚、こっちを見て運転している。危ないなあ、よそ見運転だ。前を向いて運転しろよ。次にタクシーが来た。やはり驚いている。タクシーは急ブレーキで止まり、こっちを身ながら無線機でしゃべり始めた。「マズイ」本当の刑事が来そうだ。

「撤収！」急ブレーキと共に、屋根の上の友達がボンネットまで落ちてきた。「早く乗れ！逃げるぞ！」皆さん、危険なので真似をしないようにしましょう。。

(タイトルの西部警察でもこういうシーンがあったと思います。ちなみに千葉真一は「キーハンター」です。)

## ふとんは意外と重い！

---

俺は学校の寮に住んでいた。新しい学年になると、寮替えと言って全寮生が一斉に引越しを行う。当然、寮内は引越しで廊下や階段が大渋滞。大きな荷物を持って移動するのは大変だ。俺はその時、3階の部屋から別の建物に引越ししなければならなかった。3階から大きく、重い荷物を持って何回も階段を往復した。残りはふとんだ。これまた重くは無いものの非常にかさばり、狭い階段を移動するのは至難の業だ。

俺は考えた。どうにか楽をして、ふとんを運ぶ方法がないものか？「さすが、俺！」グッドアイデアがひらめいた。ふとんは柔らかい。・・・つまり、衝撃に強い。高いところから落としたりとしても、壊れたりしない。ここは3階、例え3階から落としたりしてもふとんが割れたり、ポキッと折れたりはしないだろう。もう少し深く考えてみる。地面に落ちるとふとんは当然汚れるであろう。いいところに気づいた俺、対策を考えた。大きなシートも無い。新聞紙を敷いたとしてもセッティングの段階で風で飛ばされたりするであろう。前のページにも書いたが、俺は軽自動車を持っている。軽自動車の上にふとんを落とせば、ふとんは汚れないし、新聞紙のように風に飛ばされたりしない。軽自動車は軽でも重いから大丈夫だ。完璧といえる！

いよいよ来ましたその時が・・・。タイトルから皆さんはもう想像が付くと思います。よせば良いのに、軽自動車を建物の横にぴったりとつけ、俺の部屋から落としやすい位置にスタンバイ。狙いを定め、3階からふとんを落とした。スローモーションの様にふとんが軽自動車の屋根の部分に吸い込まれていった。

計画通りの落下に我ながら、大胆かつ効率の良いふとんの運搬が出来たと2秒くらい思った。次の瞬間、「ポフッ」という鈍い音がした。車の横で事の一部始終を見ていた友達の顔が口を開けたまま固まっていた。口を開けたまま、3階の窓から顔を出している俺の方と車を交互に見ている。「なんかしゃべれよ！どうしたんや？」 何となく予想は付いたが、車のところに行ってみた。

(ここからは、ビフォーアフター風のBGMを流してください♪)、するとどうでしょう～あんなに平らだった車の屋根が、お茶碗のようなキレイな弧を描き、水を貯めることが出来るようになりました。そして、車内空間の広さが自慢だったこの軽自動車がスポーツカー並みのタイトな空間に早代わり。俺はあまりの変貌振りに、涙がでそうなくらい後悔しました。数分前までは、車だったのに、今はお茶碗。

でも、皆さん、ご安心下さい。車の屋根はほぼ元に戻りました。どうやって戻したか？まず、車に乗り込みます。仰向けにシートに寝転がり、手と足を使い屋根を内側から「ポコポコ」押しします。これを何百回か行くと何となく戻ります。近くからは見ないで下さい。ずっと遠くからみ

ると、全く違和感がありません。ずっと遠くから見るのがポイントです。

それにしても、ふとんって意外と重いんですね。皆さん、3階から車の屋根にふとんを落とす時は、大きなお茶碗が必要なときにしましょう。

## クラスメイト達

---

学生時代、今から思えば個性的なクラスメイトが多くいた。ここではそんな彼らを紹介します。

### 歯を磨かない男

彼は15年間、歯を磨いたことが無いらしい。事実、寮生活の中でも、歯を磨いているところを見たことが無い。それでも、彼には1本の虫歯も無い。不思議だ。ただ彼はものすごい田舎の出身で小さい頃から、あまり外部集落との接触が無く、独特の文化の中で生活をしていた。歯を磨かないのに虫歯が無いのは、独特の生活習慣があったのだろうと思う。それは独特の食べ物かも知れないし、遺伝的なことかもしれない。研究者の皆さん、彼の生まれ育った環境を調べると虫歯にならない方法が見つかるかもしれません。

・・・と書いていましたが、彼が突然虫歯になってしまいました。虫歯が発覚した翌日から彼は、今までの分を取り戻す勢いで猛烈に歯を磨き始めました。そんな彼は、国立大学を主席で卒業し、大手企業に就職、エリートコースにのっている。

### 秀才と呼ばれた男

俺のクラスには、2名の秀才がいた。秀才の定義は知らないが、明らかに普通の脳みそではなかった。1人はこの前に紹介した「歯を磨かない男」もう一人は、「全て暗記してしまう男」だ。全てを暗記してしまう男は、本を一回読むだけで、ほとんど暗記できると言う。俺がなんで一回本読んだだけで暗記できるのかと聞いたら、「みんな、出来るんがちがうの？」と真面目に答えていた。そんな奴おるわけないで！一般人の脳みそをなめんなよ！俺なんか何回読んでも覚えられません。事実、彼は成績も常にトップクラスで、いつも冷静沈着、賢さが体からにじみ出ている。そんな彼は、役所に就職し、あっという間にキャリアコースにのり、行政に携わっている。

### 天才と言われた男

同じクラスに「天才」が一人いた。前に紹介したように秀才も2人いるが、その秀才達が天才を抜こうと必死で勉強していたが、結局いつも負けていた。俺は、この天才が勉強をしているところを見たことが無い。試験前にみんな徹夜で勉強しているのに、天才だけは勉強していない。それどころか、体全体にトイレットペーパーを巻きつけ「ミイラ男」になって、2階の手摺りにぶら下がり、腕の力だけで移動しながら、部屋から部屋へと皆を驚かして一人遊んでいる。（2階は手摺りだけで、バルコニーもなく、落ちたら確実に怪我をするので、本当はバカかもしれない。しかも深夜2時だ。深夜に2階の窓の外にミイラ男がいたら、誰でも驚く。）

そんな彼はスポーツも万能。筋肉隆々でクラブ活動でもキャプテンと非の打ち所が無い。しかもケンカも強い。切れると怖くて、ビール瓶を割って、相手に襲い掛かる。クラスの不良も恐れるほどの男だ。何もかも規格外の彼は、本当に紙一重だ。ある時、みんなで海にドライブに出か

けた時、彼は突然「ワッー」と叫びながら、崖から服のまま海に飛び込んだ。俺は怖くて出来なかったが、彼にとってはごく普通のことの様に感じる。それだけ彼のスケールは凡人とは違うようだ。そして、彼もまた、役所に就職し行政に携わっている。最後に言い忘れたことが・・・俺は彼に「なんで、いつも勉強もしていないのに成績がTOPなのか？」と聞いたことがあった。彼は答えた「学校の授業だけで、充分だ」と。

## 友達の下宿

---

学生時代は、とにかくお金が無い。一番お金がかかるのは「家賃」だ。この固定費は安いに越したことは無い。俺の友達はみんな安い所に住んでいた。安いには安いなりの理由がある。

### A君の下宿の場合

4畳くらいで、階段の下にある部屋。部屋の天井の半分は階段になっており、天井が斜めになっている。2階に上がる人の足音が部屋に響く。大家さんが大量のネコを飼っており、ネコがいつの間にか部屋にいる。この建物は国道に面しているが、段差があり、国道側の窓を開けると国道を走る車のタイヤが目線に見える。(つまり国道よりも一段建物が低くなっている)ある日の早朝、大家さんが国道側の窓の目の前に穴を掘っていた。後に分ったのだが、かわいそうに大家さんが飼っていたネコが国道で轢かれていたので、そこに埋めたいらしい。A君の部屋の国道側の窓を開けるとそこは「ネコの墓」になっているのニャー。ネコの墓付きで家賃は5,000円だったと思う。

### B君の下宿の場合

B君の下宿は、まずどこにあるのか分からない。見えないのだ。ステレス技術を使っているわけではない。背丈の高い「葦(あし)」に周囲を囲まれているので見えないだけだ。葦の群生地にバイクが一台通れるだけの道があり、そこを10m程進むと一軒家がある。その一軒家に数人住んでいる。B君の部屋は広くて8畳くらいある。周囲が葦の群生地なので当然湿気がパンパではない。湿地だからね！まず、玄関に入ると土間があり、土間から一段上がったところがB君の部屋だ。土間と部屋の境には何も無い。玄関を入ってきた人全員がB君の部屋の前を通過して各自の部屋に行く。プライバシーゼロだ。そんなゼロの部屋でB君とくつろいでいた。視界の端のほうで小さい何かが横切ったのが見えた。俺「あれっ、何か通ったみたいや」B君「カニや」と驚きもせず答えた。俺「なんで、部屋にカニがいるんや？」B君「この家のすぐ横、川あるから」・・・ゴキブリが出る部屋はあるが、カニが出る部屋は初めてだ。B君によるとカニはまだいい方で、ムカデも上がってくるらしい。プライバシーゼロ・カニ付きで家賃3,000円だったと思う。安い！ちなみにB君は湿気のせいで体調が悪いと言っていた。

### C君の下宿の場合

ちなみにC君は天才の人です。C君の下宿は特殊で、醤油の製造工場跡です。背丈を越えるほどの大きな木樽が一行にいくつか並び、はしごで一段上がると部屋がある。一段上がると丁度、木樽の天端にでるので、恐らくむかし醤油を作る工程で上から「まぜまぜ」するために作られた場所を部屋にしているようだ。そんな「まぜまぜ」の場所に彼は一人だけのようだ。他に誰も住人はいないようだった。ちょっと怖いぜ！ここ。醤油のお化けが出そうだ。そして、確かこの近くに「首切り地蔵」とかいう場所があったように思う。ますます怖いぜ！でも、C君は前にも言ったようにスケールが違うから大丈夫だ。

## 土木屋という仕事

---

土木、つまり道路や橋を造ったりする仕事です。日本の土木技術は素晴らしいもので、日本の建設会社は世界中で活躍している。しかし、職業としての人気はありません。昔から3K（危険、汚い、きつい）職場として有名です。また、ニュースでよく容疑者の土木作業員・・・や建設作業員の・・・と犯罪者が選ぶ職業No.1として君臨している。実は私は、土木工学を学びゼネコンと呼ばれる建設会社に就職した。現場の構成は、TOPのゼネコン、下請けの建設会社、孫受けの建設会社・・・・・・・・・・末端が日雇い労働者となる。日雇い労働者には様々な人がいる、年寄り、在日韓国、朝鮮人、日系南米人、元ヤクザなど、今は現場に入るのが厳しいが、むかしは何でもありで、働く気があれば誰でも良かった。だから犯罪者も紛れて働いていたし、まじめに働く者も当然多くいた。残念なのは悪いニュースだけが目立ち、土木業界全体が落ちぶれた奴らが働く職場というレッテルを貼られていると言う現状だ。

特に実情を知らない女性には毛嫌いされ、実際に現場で子供が道路工事に興味を持ったようで、現場を見ていたところ、母親が「勉強せーへんかったら、あのおじさんみたいになってしまうんやで」と言っているのが聞こえた。一応、国立の学校で勉強してこんなことやってるんですけど・・・！みんな真面目に現場で働いてます。日雇いだからってバカにするなよ！大企業の社員よりも仕事は出来るし、キチンと頭を使ってます。

## 名ばかりの建設会社

---

私は、夜間の道路工事を担当することになり、日中、工事区間のお宅に、工事にご協力をお願いしますという「ビラ」の配布とお願いに行った。工事区間が長いため、かなりのお宅、お店を回った。夜の仕事をしている女性が、下着姿で出てきたり、不動産屋の親父とケンカしたり、チンピラにいじめられたりとけっこう楽しめた。そんな中で、いかにも大阪らしい場面があった。

それは、2階建ての古い建物で看板には「〇〇建設」とあった。同業者か！と軽い気持ちで階段を上り、2階にある事務所の入り口をノックした。何の返答も無い、しかしドアの向こうは騒々しい、ドアを開けて入った。10人程度が全員マージャンをしている。雀荘になっていた。建設会社の「け」の字も無い。その中の一人が振り向いて「なんじゃい、なんか用か？」といきなり怒っている。私は「今度この前の道を工事しますんで・・・ビラを・・・」と言ったら、「じゃかしい、そこ置いとけ！」と怒鳴られたので、工事のビラを入り口の近くにあるテーブルに置いて帰った。

その後、工事が始まり、中身が雀荘になっている建設会社の前を工事することになった。工事を始めたとたん、2階の窓が開き、「じゃかしいんじゃ、おまえらぁ、うるそうてマージャンもできへんやろ！ボケエ～」と言って窓を閉めた。一瞬みんな驚いたが数秒後に何も無かったように工事を再開した。なんかいいなぁ～この感じ。大阪らしくて。こんな感じばかりだといいいのだが、これから色々なトラブルに見舞われることになる。

大阪には、この人何の仕事しているんだろうという人がいっぱいいる。夕方あたりから酒飲んで出来上がってプラプラしている。夜間工事では、そういう人がやたらと絡んでくる。始末が悪いのが、金を要求してくる奴等だ。

・50歳くらいの男（稲川淳二風の男）

酔ってはいないが、工事中の道路の段差で足をくじいた・・・とご丁寧に足を引きずりやって来た。演技派だ。もちろん現場監督の私は、キチンと対応する（最初は）、稲川「責任者を出せ！」私「私です。」稲川「えらい若いな」私「どうしましたか？」稲川「工事のせいで足をくじいた、どうしてくれる」私「どこでくじいたか案内してください」稲川「ここじゃ！」（2センチ程度しか段差が無い）私「こんなところで怪我するわけないやろ！」稲川「嘘やおもてんのか！怪我したんじゃ」私「うるさい！」稲川「何をえらそうに言うтонじゃ！俺を誰やおもてんじゃ！おまえどこのどいつじゃ！」この時点で、顔を付き合わせ、お互い胸で体当たりしている状態になる。（ここで、相手も手を出したらまずいと正常な判断をしている人なので安心する）私「（名刺を出し）文句あったらいつでも来い、逃げも隠れもせん」稲川「わかった、これからワシは盆休みになるよってに、盆明けに連絡やるから」と急に事務的になり帰って行った。（もちろん普通に歩いて）

盆が明け、本社の上司に呼び出された。一言だけ怒られた「お前、名刺をばら撒くな！」・・・あの稲川め、本当に盆明けに本社に連絡してくれたようだ、まあ、その他にも同じような感じで名刺を渡してからなあ〜何件くらい苦情が来たのかなあ〜。

## チンピラさん、いらっしゃ〜い2

私はまだ、道路の夜間工事中だ。夜中の12時を回った頃、重機の前に突然、男が入ってきた。「工事、やめんかい〜」と叫んでいる、重機のオペは危ないので操作が出来ない。私「ちょっと、あんた、危ないやろ！」男「工事、中止や〜」と叫んでいる男を重機の前から離して話を聞くことにした。

その前にその男の服装は派手な岡本太郎のようなセーターを着て、角刈り、ゴリラのような顔、40歳くらい、チンピラか？本物か？見分けが付かない。その男が言うには「ワシはこの周辺のパチンコ屋の用心棒をやっとる、誰の許可で工事やっとるんじゃ」と言っている。この手はだいたい嘘で小遣い稼ぎにヤクザを装っているだけの馬鹿が多い。「あ〜そうですか」と言いつつ、工事を進めるように手で合図していたのを見つかり、その男はまた重機の前に立ちほだかり工事を止めようとする。夜間工事は遅れが許されない。朝の通勤ラッシュ時までには道路を開放しなければ、大渋滞になり始末書だ。

しかたない「あれ」を出すか？「あれ」とは夜間工事に入る前に上司から1枚の名刺をもらっていた。その名刺には筆書き文字で名前と電話番号だけしかない。見るからに恐ろしく、怪しい名刺だ。上司いわく、この名刺を出せば、大概是治まる・・・と正に水戸黄門の印籠の現代版といえる。あ〜使える、とうとうこの名刺を使う時がやって来た。このゴリラ男は殺されてしまうのだろうか？かわいそうに！私はゴリラにやさしく「ちょっと、待っててください」と言い公衆電話に入った。（この時代にケイタイは無い）笑っている、公衆電話のガラスに笑顔の私が映っている。ダイヤルを回す（回すタイプです）、楽しみだあ。呼び出し音が鳴る、どんな怖い声の人が出るんだろう？自己紹介をした方が良いか？状況報告だけでいいのか？いや、もう夜中の1時近い、名刺の主は寝入りを起こされてきつと機嫌が悪いに決まっている。そうだ！まず謝ろう、こんな夜分に大変申し訳ありません、カクカクシカジカでと状況を的確に言おう。失礼があってはならない・・・呼び出し音がまだ鳴っている、あれっ、誰も出ない。一旦切る。またかける。誰も出ない。怒られるのを覚悟し、しつこいぐらいかける。誰も出ない。・・・ん〜なんだよお！

がっくりとし、公衆電話から出てきた私にゴリラは「何をやっとなんじゃ、誠意を見せんかい」と言ってきた。誠意とは、つまり金を出せと要求している。ゴリラは少し賢いようで「金を出せ」というと恐喝になるので誠意という言葉でごまかしている。とぼけて「誠意ってなんですか？」と聞いたら、「誠意は誠意じゃ」とゴリラ脳で答えた。

しかたない本日2回目の「あれ」を出すか！「あれ」とは日ごろからこういうシチュエーションが多いため、私は財布には3,000円しか入れていない。あとは念のために靴下の中に1万円を隠している。私はゴリラに財布を見せながら、今日はこれしかもっていない、今日のところはこれで勘弁して欲しい・・・と言い終わらない内に「おんどれ！なめてんのかあ〜」とゴリラは怒鳴

った。このままでは工事が進まないの、他に人にも1万円を借り、2万円でその夜は帰ってもらった。

その日は無事工事が終わったものの、工事はまだまだ続く、またあのゴリラ顔は来るだろう。次は絶対にゴリラ顔の思うようにはさせないつもりだ。私は考えた。今夜もヤツは絶対来る！馬鹿だから絶対来る。実は私は5年間みっちり空手をやっていたので素人には絶対負けない自身がある。組み手も得意な方だ。でも、ナイフ出されたり、ボクサーだったら負けそうだし、心配になってきたので、後輩の柔道有段者に事情を話し、その夜来てもらった。ちょっとずるいが2人でゴリラ顔をしばく作戦だ。もしかしたら、ゴリラ顔が本物ヤクザだったり、何か武器を持っているかもしれない、そういう事を考えれば、全くずるくない。むしろ良心的だ。こっちは完全丸腰だし・・・。

その日の夜、やっぱり現れた、ゴリラ顔がホントに来た。ホント馬鹿だな！こいつ。「おい！わかってるやろな！」ゴリラ顔はこなれた口調で言ってきた。私「はいっ」（よわったなあ～という表情で）「すみませんが、こっちの方へ来てください」・・・と裏路地へと案内した。裏路地の電柱の下で、私と後輩でゴリラ顔を電柱に押し付け、一発かましたる気持ちで、私はゴリラ顔の横の電柱をおもいきり拳で殴って見せた。（私は拳ダコがあるのであまり痛くない・・・はずだったがかなり痛かった）そして、もう忘れてしまったが、ゴリラ顔に2人で「おっさん、なめんなよ、しばくぞ、こら！」みたいな感じで言葉だけでびびらせた。

よーし、ここから実力行使や、1／3殺しくらい覚悟しろと思った瞬間、ゴリラ顔は、予期せぬ行動に出た。「待て、待て、やめてくれえー、お前ら、一般市民になんてことするんや、暴力はあかん、暴力反対や！」私「誰が一般市民や、ワレ、金取ったやないか」ゴリラ「待て、俺の話聞け！お前らは素人にしとくのはもったいない、ええ度胸しとる、〇〇組の親分しとるか？」私「知ってるわけ無いやろ」ゴリラ「まあ、ええから、ワシがその親分にお前らを紹介してやる、今日はもう遅い、明日紹介したるからな、なっ！」と言って転がるように走って逃げていった。

ざまあ見されせ！勝ちや。2人でゴリラ顔の間抜けな様子をモノマネして大笑いした。最高の気分だった。「あっ、金返してもらおうの忘れた！」「でも、明日来るみたいなこといったしな！」

・・・次の日、ゴリラは来なかった。「金返せ！」

## 本物の迫力

---

私は、まだ夜間工事を担当している。一週間に1回は何かトラブルがある。大阪らしい毎日だ。大概はチンピラ系なので、裁き方もこなれて来た。すぐ金にしようとするヤツは大した事がない。安心して立ち向かい、撃退することに成功している。そんな時、とうとう本物にぶち当たった。文章がへたくそなのでその恐怖の度合いが伝わらないかもしれないが、自分が当事者と思って読んでくれれば伝わるかもしれません。よろしく！

真夏の大阪。ニュースでは人を刺した事件が報道され、犯人の動機は「暑いので、イライラして人を刺した」と言うものだった。私の周囲は「わかる！」というくらい蒸し暑い熱帯夜が続いていた。私もあまりに暑いので、ジュースばかり飲んで、飯はほとんど食べずの状態が続いていた。つまり、すごい暑い夜が続いていた事を言いたい。

そんな夜、工事のために「占用」（カラーコーンやバリケードで工事区間を囲み、立入禁止にすること）している場所に、車が2台ズカズカと何の躊躇も無く駐車して来た。「あらら」これでは工事が出来なくなるので、注意することにした。2台の車からは、いかつい7、8人の男達が降りてきた。私は男達が歩いて立ち去ろうとしている後ろから声を掛けた。「あのう～、ここ工事するんで車どけてください。」

男達の集団がピタリと止まり、先頭で歩いていた男が少しだけこちらに顔を向けた。（角度的には45度程度向けただけで、私の方を見ている訳ではない。）その動きに合わせ、後ろについていた男達が道を空けるように先頭の男と私の間に一直線の空間が出来るように動いた。先頭の男は一言だけ小さく、「じゃかしい」（うるさいの方言）と言って、正面の寿司屋に入ってしまった。

・・・何だかとても「怖かった」たった一言だけだが、本当に怖かった。「じゃかしい」なんて数えると何百回も言われているが、今回のはいつもの「じゃかしい」とは違う。声のトーン、声の大きさ、発音などすべて「ワンランク」上をいく様な、正しくそして重いものだった。これをネイティブと言うのか？

しばらくその迫力に圧倒されていたが、我に戻り、寿司屋の中に入ってもう一度お願いしようと、寿司屋のドアに手を掛けた時、寿司屋の隣の店の主人らしき人が、「兄ちゃん、やめとき！」と言って来た。その人は、夕涼みで店前に椅子を出して座っていて、事の始終を見ていたようだった。その主人いわく「ワシは長年ここで奴をみてるけど、あいつはやる奴や、本当にやる奴や、行ったらやられるでえ」私「ホンマに？」主人「やめとけ！」

その主人の「やられる」とは正しく漢字表記すると「殺られる」を意味するらしい。事情が変わった。こういうのは不得意です。あっさり諦め、会社に連絡し、上司に対応してもらうようにした。上司に来てもらったのも、その主人の意見を尊重したものだ。主人いわく「兄ちゃんが、もう一回言っても、奴は子分達の手前、引き下がる訳にはいかん。兄ちゃんの上の年取っ

た別の人間に行かせんとあかん」私は「なるほど」と思い、このランニングシャツ姿の頼りなさ  
そうなおっさんがスターウォーズのヨーダのように頼もしく思えた。結果、上司の説得が実り、  
車をどけてもらった。

以上ですが、やはり予想通り、描写が甘く、おまけに短く治まってしまったので、恐怖が伝わ  
ったかどうかは定かではないが、そういうことがありました。何となく尻切れトンボ的なので、  
最後に教訓で締めたいと思います。「本物は怖い！」

## マグナム？

---

しつこいですが、まだ夜間道路工事中です。真夜中の工事占用場所に、一台の見慣れぬ車が入ってきた。「ああ～また何か来た！」と思っていたら、一人の若造が降りてきた。私と同年代か少し上程度（25～30歳程度）だ。ただ者ではない事は、すぐに分った。腰に拳銃の「ホルスター？」がある。露骨に見えている。まじかよ！（漢字表記では「本気かよ！」）大阪もここまで来たか！何でもありかよ！まっすぐにこっちに向かって来る。・・・そう言えば、数々のトラブルがあったよなあ、誰か知らんが恨まれてるかもなあ、仕返しか！新手の強盗か！現場の作業員も「あいつ、ピストル持ってるぞ！」と叫んでる。私から5m程になったとき、拳銃ではなく、胸のポケットに手を突っ込み手帳を出して来た。

「警察手帳」だった。内心「ホッとした」。

「捜査のため、この場所に警察車両を置かせて欲しい」とのことで、私は快諾した。（カッコいい表現でない？）でも、いったい何の捜査で、この道路のど真ん中の工事区間に車を止める理由があるのか？理解できないが、警察官の言うことだから従った。

しかし、この若い警察官は、制服ではないので「刑事」なのか？こんな若い「刑事」もいるんだなあという感じだ。いい忘れていたが、最初に拳銃のホルスターがすぐに目に付いた理由が、銃身がやたらと長かったからだ。私はマニアでもないのに詳しくは無いが、日本の警察官の拳銃は「南部」と言われアメリカ映画に出てくるような、でかい拳銃は支給されないのでは・・・と思っていたが、この若い刑事は正にマグナム級の「どでかい拳銃」を持っていた。ダーティーハリーか寺尾聰かといった具合で、腰から「ひざ」近くまで銃身があった。

・・・で今から考えると、車両は「覆面」と言っていたが、普通の車だったし、警察手帳もまじまじと見たわけではない。（今のように「FBIだ」というようなマークがあるわけでもなく、表紙に警察手帳と書いているだけ）しかも一人だったし、妙に若かったし、怪しいな。

ちなみに、私の友人は自分で〇〇県警の何々と勝手に刑事の名刺を作り、捜査のためにここに来たと、スナックのおねえちゃん達を騙していたので（これは犯罪だろ）その類かもしれない。

そんなこんなで、大阪の夜は色々あり、楽しくもあり、恐ろしくもある。

## 暴走族との抗争

---

夏場、夜間の道路工事をしていると、暴走族がよく出てくる。暴走ではなく、ちんたらと棒を振り回して走り、他の車両に迷惑をかけるだけのバカ集団なので腹が立つ。我々の現場も被害にあっている。被害とは、あいつらは工事のために並べたカラーコーンを端から蹴っ飛ばしながら走るの、道路にカラーコーンが散乱し、一般車両が通行できなくなり苦情が来たり、まだ固まっていない舗装したての道路にも入り、仕上がりをめちゃくちゃにし、おまけにそれを追跡しているパトカーまで、その箇所に入り、更に舗装がめちゃくちゃにされ、いい加減我慢が限界に近づいていた。

しかし、法治国家のこの日本では、暴走族とはいえ、うかつに手を出すことは出来ない。・・・とお思いの方も多いと思いますが、20年以上前のお阪はけっこうなんでもアリだった。つまり、今では新聞に載ってしまうようなことも、やっていました。（もしかして、私だけ？）ある意味いい時代なのです。今回はそんなお話です。よかったら、名前だけでもおぼえて帰ってください。・・・？

実はその日の夜は、暴走族が出ることは分っていた。何故かという、前の日、一般市民が暴走族に腹を立て、角材を投げつけたところ、車輪に絡まりバイクが転倒し、乗っていた少年が死亡した事件があったからだ。奴らはその弔いのため暴走行為を行うだろうという予想だった。案の定、いつもより多めのバカ達が暴走していた。

事件に便乗し調子に乗っている奴らに対し、怒りが治まらない私は、走っているバイクの奴を引き倒そうと道路に立ちふさがった。私を避けて走るバイク達、その中の一台にターゲットを絞り、後部座席の奴の服を掴んで引き倒そうとしたが、振りほどかれ失敗。歩道に戻ってきた私に制服警官が「おまえ、警察の前ですなっ！」と注意を受けた。次にその警官は、私のように道路に出て行き、横を通り抜けるバイクの少年の「スネ」の部分を警棒で小さく瞬間的に「コンッ」とどついてた。周囲には見えないように、痛そうなところを警棒で殴っている。いい警官だ。

今夜は、このせこい警官に任せることにし、私は別の機会に実行しようと思う。

すぐに実行の日が来た。・・・と言うか早く実行することにした。当然私一人では勝ち目が無いので、現場のおっさん達も協力してくれることになった。優しい人達だ。現場のおっさん達とは、下請けの建設会社の方々に、むかし、間違いなく、絶対、100%悪かった人達である。やる気マンマンという言葉が、この日のためにある様な雰囲気は充滿している。あまりにやる気マンマンなので、死んでしまうくらいの怪我を負わせてはいけない、スコップの先の方で頭を殴らないの2点を注意した。

暴走族を見るために「ギャラリー」が集まってきた。20～30人はいる、暴走族が走る時にはやし立て、喜んでいる。「むかついた」。この日の私は現場のおっさん達と同様に、やる気マンマンになっていたの、4車線をはさんだ向こう側の歩道に群がっている「ギャラリー達」に私は「お前らはあいつら（暴走族）の仲間か！」と大声で叫んだ。・・・返答が無い、・・・私「答えんかい！」しばらくしてその中の一人が「は～い」と腑抜けた返答をした。その返答を聞き、私は切れてしまった。

私はスコップを持ち、道路に飛び出した。車が急ブレーキで私の横で止まって、運転手が「死にたいんか、ポケッ」と叫んでいる。私は運転手の顔を一瞬だけ見て、中央分離帯のフェンスを乗り越え、ギャラリー達に襲い掛かった。

ギャラリーには女もいたようで、女の悲鳴が響き、四方八方に散らばって逃げる若者達の姿・・・誰もいなくなった。ギャラリーはもう誰もいない。（つまり、計画実行の時が来た。）

しばらく暴走族の音が聞こえない、準備は出来ている、あとは奴らが集団で現れるのを待つだけだ、その間、作戦を練った、奴らを襲うためにはギリギリまでおびき寄せる必要がある。相手はバイクと車なのでタイミングが悪いと逃げられてしまう。そのため、奴らが現場に来る直前までスコップで地ならしを行っている「体（てい）」で奇襲攻撃するしかない。攻撃合図を出すのは「私」、あとはおっさん達に任せる作戦だ。

暴走族の音が次第に大きくなり、近づいているのが分った。やがて視認できるところまで来た。曲がるなよ、まっすぐこっちに来いよ、間違いなくこっちに来る、来る、来るぞ！、攻撃合図は私が出さなければならない。緊張してきた。まだだ、まだだ、もういいか？、いや、まだだと何回も自問自答する。おっさん達はというと、私の合図を今か、今かと待っている。その目は、シマウマを待ち伏せているライオンの様だ。先頭のバイクはもう20～30m程に近づいた。

・・・今だ！「行けえー」

おっさん達は、バネの様にはじけ、スコップを振りかざし、バイクに向かって襲い掛かった。先頭車両は転倒し、後続車が次々と突っ込み転倒、投げ出された若造におっさん達が襲い掛かる。族たちはパニック状態だ、奴らは転がるように逃げ惑う、盗んできたのか、1リットルのビン（この時代にペットボトルは無い）が周辺に転がり、中からはガソリンがこぼれ、現場周辺はガソリンの臭いが充満していた。おっさん達に混ざり、現場見習いの17歳の兄ちゃんも参加していた。兄ちゃんも頑張っている、族の髪の毛をわしづかみにし、グルグル回している、大車輪状態だ。あまりの遠心力でつかんでいた髪の毛が抜け、逃げられたが、両手いっぱいの髪の毛を私に見せ、嬉しそうに笑っていた。

重傷者はいないようだ、もちろんこっちは無傷だ。おっさん達は流石で奴らに逃げるだけの力

を残してしばいている。しかし中には逃げられなかったバカもあり、2、3人生け捕りにしていたので、私は彼らにやさしく「もう、俺らの邪魔はすんなヨ、わかったか？仲間にも言っとけヨ」と言うと「もうしません」と約束してくれた。やさしく言ったのは、私なりの作戦があり、そうした方が逆に不気味で恐怖感が倍増すると思ったからだ。それに、なんとなく「かっこいいし・・・」

しかし、奴らは集団だとエラソーりにしているものの、とっ捕まえて、一人にすると半泣きになる全く根性の無い奴らだ。まっ実際、おっさん達はホントに怖いからしかたないが、大人が本気で切れるとこんなもんじゃすまんからな！

族が誰もいなくなったあと、現場には乗り捨てられたバイクが10台程転がっている。どうしよう、これ。持って帰る訳にも行かないし、そうだ！お巡りさんに電話しよう！得意の110番をダイヤルし、「バイクがたくさん乗り捨てられています」と通報。すぐ近くに警察署があるので、一人だけ警官が来た（深夜だからか？）

警官「なんでこんなに族のバイクがあるんや？」私「さあ〜」警官「乗ってた奴らはどこにいったんや？」私「さあ〜」警官「これだけあると、トラックがいるなあ、仕方ない応援を呼ぶ」・・・それから10分ほど経つと制服警官が大勢集まってきた。トラックが無かったらしく、制服警官が族バイクに乗り、集団で近くの警察署まで暴走して行った。結構楽しんでいて、フォンフォンと必要以上に吹かしながら、警官たちが走る（写真撮りたかったなあ〜）

その次の日からは、暴走族は現場近くに来なくなった（遠くで暴走しているが）、工事区間が進捗具合で多少移動するのだが、族たちは我々の姿を見ると、「Uターン」するようになった。勝った、これで仕事ははかどる。現場のおっさん達も、以前の様に静かに真面目に働いている。「借りてきたネコの様に」

## 大阪の銭湯はお花が一杯

---

私は会社の寮に住んでいた。今からは信じられないが、個室ではなく先輩と2人部屋だ。当然、後輩である私は何の権限も無く、テレビのチャンネル権はもちろん先輩。仕事が終わって部屋に帰っても、先輩に気を使いプライベートの「プ」の字もない。トイレ、風呂はもちろん共同だ。食事は食堂があり、夕食は22時までに食べなければならない。仕事が遅くなると食べられないので外食となる。外食となると周辺で開いているのはラーメン屋くらいで、当時コンビニもあまり無く、あったとしても23時でしまっていたと思う。・・・そんな細かい話は、ここでは必要ないように思う。

「寮の風呂が壊れました。」寮長が教えてくれた。私は、まだ夜間工事担当なので、日中寝ている。当然風呂は日中入ることになる。寮長から近所の銭湯のタダ券をもらい、面倒だなと思いつつ、歩いて銭湯に向かった。昼間にタオルと着替えを持ち「プラプラ」歩いて銭湯に向かっていると、すごく自由な感じがし、働いている人がかわいそうに思えた。「みんな、大変だなあ、頑張りや」と声を掛けたくなる。天気が良いからなおさらだ。そんな余裕の気分で気持ちよく歩いているうちに銭湯に着いてしまった。もう少し歩きたかったなあ。

銭湯は何年ぶりだろう。おまけに、この地域の銭湯は初めてだ。小さい頃は、風呂が無かったので銭湯に行っていたが、どうやって入れれば良いのか？昔とシステムが変わっていたら嫌だな・・・と思いながら銭湯の「のれん」をくぐった。「男」と書いているのれんだ。番台があり、昔と同じシステムだったので安心した。子供の頃、背が低くて出来なかったが、大人になって背が高くなった分、女の脱衣所が覗きやすくなっていた。冷蔵庫には「ドリプシ」「コーヒー牛乳」「フルーツ牛乳」が昔と同様に置かれており、感動した。牛乳瓶の紙のフタを開ける道具（円の中に針があるやつ）も健在だ。何か、なつかしいなあ。この銭湯は初めてやけど・・・

気分よく風呂の扉を開け、中に入った。昼間にもかかわらず、10人くらいの人がいる。ナカナカ繁盛しているなこの銭湯。と思いながら一歩、二歩と歩いた。なんだ！ここは！きれいなお花が一杯咲いている。花だけではない。カラフルな色使いの龍や仏像みたいなものもある。でた！出ました！「モンモン（刺青）」です。しかも全員刺青です。入れていないのは「私だけ」です。銭湯の貼り紙に「刺青お断り」とよくあるが、見間違ったのか「刺青がない方はお断り」だったのか？私だけ刺青が無いのは、ルールを守っていないような気がして申し訳ない。今から刺青を入れるつもりも無いし、寮の風呂が直るまでここに通うことになる。明日も間違いなくここに来る予定だ。

残念ながら、この銭湯の状況では、私が刺青も入れていない「下っ端のぱしり」に見えるだろう。くやしいが「私は絶対、刺青は入れない」と決めている（後にその理由を書きます）ので下っ端のままでも我慢します。

そもそも、何で刺青だらけなのか、寮の先輩に聞いてみた。理由はこうだ。大阪の銭湯は、昼間はヤクザ、夕方5時から是一般の人と住み分けをしているらしい。一般人の時間帯に「モンモン」が入ると一般の人が怖がるので、ヤクザはその前に入る（9時～5時ではないから）。むかしヤクザの「堅気には迷惑をかけない」的な美学を感じる。（ヤクザを推奨している訳ではありません）

・・・と言うことは、一般人達は、「ヤクザのだし」が効いたお湯に浸かっていることになる。つまり、大阪にヤクザが多い理由は、知らず知らずの内にヤクザから出た「ヤクザ汁（じる）」が体に染み込み、気づいたら「ヤクザになっていた」と言うケースが多いと推測できる。これは、まだ誰も調査をしていないが、厳密に調査するとノーベル賞ものかもしれない。皆さん、関西のうどんの「つゆ」は黒くないでしょう？ご存知の様に大阪は「だしの文化」なのです。

急に思い出しましたが、私の友人は、銭湯で友達と「ポコチン」のつかみ合いをして遊んでいたのですが、友達と間違ってヤクザの「ポコチン」をつかんでしまった。（よく見ると背中に絵が描いてあった）ヤクザにしばかれそうになったとき、とっさの判断で「へっへっへ」と笑いながら床のタイルをペロペロと舐め始めた。そう、そいつは「アホの真似」をしたのだ。ヤクザがにらんでいる間、ずっとタイルを笑いながら舐めた。ヤクザは「チッ」といって諦めた。

すごい奴だ。機転が利く、しかも最悪の事態を笑いながらクリアした。こんなことが出来る奴は他にいないだろう。そんな彼は、どんなマズイ物も「うまいっ」と何でも全て食う。通学道路に落ちていた「さけ茶漬け」もそのまま、湿った粉末の状態でも口に流し込み「うまいっ」と言う。ゴミ箱のような男だ。

そんな彼は、大人になり「青年海外協力隊」として発展途上国のために働いた。やはりスケールが違う。海外でも落ちていた食べ物を食べていたのだろうか？気になります。

話は戻りますが、その後も刺青の方々と寮のお風呂が直るまでの間、一緒にお風呂に入りましたが、トラブルは一回もありませんでしたし、逆に仲良くもなりませんでした。

なんだか「落ち」の無い話になり、誠に申し訳ありません。文章がうまい人が書けば、3倍は面白くなると思います。小学生から作文は苦手だったことを今、思い出しました。

## 私の前で話さないで下さい

---

ある現場で私は、可愛がられていた。理由は一番若いからだ。現場監督と言う肩書きは持っているものの周りのベテランの現場作業員から見ると子供みたいなものだ。私は立場的にはゼネコンの職員なので「上」だが実質、現場では「下」だ。それは遥かに現場経験がある作業員の方が仕事出来るからだ。現場をスムーズに工程どおり進めるには、現場の人と仲良くやることが重要だ。そこで、私は分からないことは素直に「現場作業員」に聞いて教えてもらうようにしていた。

そのお陰で、現場はスムーズに進んでいたし、下請けの親方達にも気に入られ、休憩時間には「兄ちゃん、茶飲みに行くぞ」と喫茶店に連れて行ってもらったりしていた。もちろんおごってくれた。気になるのは、その親方達は、むかし絶対悪かった人だと一目で分る人達であった。なぜかという、「まゆ毛」が刺青だし、話す内容が「ヤバイ」話だからである。

「ヤバイ」話とは、

親方A「あいつ、死んだらしいぞ」

親方B「えっ、あいつみたいな奴が死ぬんか？」

親方A「まあ、薬やってたからなあ」

親方B「そやなあ、薬やりすぎやったなあ～、それか？理由は？」

親方A「多分そ～や」

親方B「しかし、あいつはパワーあったなあ、セメント袋2袋は平気がかついでた、あのパワーは薬やわ」

親方A「パワーあるし、年寄りにも優しくかった、土方のおっさんがへたったら、そのおっさんの分まで運んでやってたからなあ」

親方B「せやけど、切れたら、おっそろしいからなあ、あいつ」

親方A「せや、せや、2人殺しとるからなあ」

親方B「おう、しっとる、しっとる」

こういう会話を私はアイスコーヒーを飲みながら聞いている。

まとめるとこうだ。

少し前、ある現場に薬漬けの大男がいた。とにかくパワフルで現場では超人扱いされていた。1袋40キロあるセメント袋を2つ平気がかついで運び、年寄りにはやさしく、現場では年寄りの土方のおっさんまでかついでいたという。しかし、薬が切れると暴れ、誰も手がつけられない。凶暴になったときに2人殺めているらしい。その後、薬が原因で亡くなったらしい。私の想像では、「フランケンシュタイン」が目に浮かんでくる。

そんな会話を聞いて、「すみませんけど、俺の前で、そんな話やめてくれます？」といったが

、親方達は「別に、ええがな！」で済まされてしまう。

その後、昨日まで現場ですごくパワフルに働いていた人が急に来なくなったので、「〇〇さんは？最近けーへんねえ？」と聞いたら、親方いわく「あいつ、薬みつかって、今逃げてるから、もう、この現場にはこんやろ」とのことでした。ちなみに同じ理由で来なくなったのは2人目です。もう一人は外国人でしたが・・・

皆さん、薬は良くないようです。その筋の人も自分では手を出しません。手を出した人の結末は、「死」が近づくということです。

「おい、監督、これ買えへんか？」と右手の人差し指と親指を立て、人差し指を中心に左右に回転させている。私「なんや！それ？」

私に話しかけたのは、コンクリートの表面を均す「左官屋」のおっさんだ。そのおっさんは、下請けの建設会社の社員のはずだ。いつもひげ面で、小汚い格好をしている。へらへらと話し、常にしまりが無い雰囲気がある。その風貌は「泉谷しげる」そっくりだ。実は前から思っていた。絶対似ている。本人かもしれない。それくらい似ている。

その泉谷の右手は「拳銃」をイメージするものだった。

私「拳銃？」

泉谷「せや！」

私「なんで、俺に言うてくんの？」

泉谷「お前やったら、殺したい奴、一人や二人おるやろ？これ、いるやろ？」

私「いらんわ！なんで、そんなもん、あるんや」（この人は、どうも私のことを誤解している。私のことを「その筋の人」と思っているのか？）

しかし、まさか泉谷がそんな物騒な話をする人だと想像もしなかった。てっきりただのだからしない人だと思っていたが、どうやら昔はその筋にいたようで、よく分らないがフルタイムでは無く、今はパートみたいな感じでやっているようだ。（そんな勤務形態があるのか？）

話は戻って、何故、泉谷が拳銃を持っているのか？理由を聞いてみた。数日前、突然、泉谷の家に古い友達が訪ねてきた、訪ねて来たというか、逃げて来たという表現が正しい。何から逃げているかと言うと「日本の警察から」らしい。分りやすく言うと「警察に追われている奴をかかまっている」状況らしい。（120%犯罪です）

・・・で、かかまっている奴はというと、その分野では有名な人物らしく・・・と言っても、どんな分野なのかまず、説明をします、「改造拳銃分野」らしいです。ちょっと前に「日本の警察」と言ったのは、その男は、香港で長年修行（改造拳銃の）を行っていたようで、あっち（大陸）とこっち（日本）を股に架け活躍している国際的な改造拳銃職人で、その筋の人からは絶大な信頼を得ているらしい。

よく分らないが、改造拳銃も色々有るようで、質の悪いものを掴まされることもあることから、「誰の作品か？」ということが購入する時の重要点となるようです。本物とは違い、モデルガンやその他のものから作る「改造拳銃」は「作者の信頼性」が一番なのです。（らしいです。）その男は、何故そんな信頼を得るようになったか？そんな聞いてもないことを泉谷は丁寧に教えてくれた。その男の手の指は数本しか無いらしい。何故か？それは、自分で作った改造拳銃は

必ず自分の手で試し撃ちしてから納品するという哲学があるからだ。お客には確かな物を渡したい。そんな一心で修行初期の未熟な時に何回も失敗をし、自分の指を飛ばしてしまったらしい。そして指の無い彼の手は、信頼の証となった。そう、彼は常にお客様目線なのだ。・・・もっと他の方面にその心意気を使ってほしかった。

要はかくまっている男の拳銃は、信頼の置ける物なので買ってくれ・・・ということである。なるほど、それなら買ってでもいいかな！っとホンの一瞬だけ思ってしまったが、すぐダメだと気づき、丁寧にお断りしました。どうやら、いつまでもかくまってる事も出来ないので、「逃走資金」を捻出するために「必要と思われる人物」に営業をかけているとの事でした。

・・・「もう一回言います、なんで、私に声掛けたの？」

## 高速艇の人

---

前にも書いたように、工事現場には様々な人がいる、特に日雇いで来る人達は何らかの事情があり、その日暮らした生活を送っている人も多い。（20年ほど前の話です・・・）

現場では大体、10時と15時に休憩があり、タバコを吸いながら雑談してすごすのだが、その時に各人の昔話や素性が聞けたりして、結構楽しいというか人生の勉強になる。悲しい過去や田舎に残してきた子供の話、外国人の場合は国の話など厳しい人生を生きてきた生の教科書と言える。

ぬくぬくとたいした仕事もしていない役人と比較し、なんと不公平な世の中と若かりし自分は思っていた。（現在も役人との仕事が多く、キャリアと呼ばれる人は確かに頭も良く、出来る人も多いが、ノンキャリアは出世を諦めているのか、いい加減な仕事振りが目立ちすぎる）もちろん全員がそうではないが、民間の会社と比べて、明らかに質が劣ると言わざるを得ない。そのような役人と比べて、生活の保証もなく、地位も名誉もなく、頑張っている人達が現場にはたくさんいる。役人の仕事ぶりは・・・（公務員の人が読めば気分が悪くなると思いますが、民間社員のみがみだと思ってください。）・・・でなんでしたっけ？「高速艇の人」ですね。

その人は、最近現場に入るようになった。年は40代で言動がしっかりしている。ふらふら日雇い土方をやるタイプではなさそうだ。何か事情がありそうだ。見てくれは「鳥羽一郎」に少し雰囲気似ている。その鳥羽さんと仲良くなり色々個人的なことが聞くことが出来た。やはり思ったとおり面白い素性を知ることが出来た。

素性・・・聞きたいですよ？実は色々な犯罪を犯した人を見てきましたが、これは初のケースです。めずらしい職種です。職種と言っても犯罪の種類ですが、やっぱり鳥羽一郎がイメージどおりです。そんな世界もあるのかと感心しました。しかし、その鳥羽さんが、なぜ今、現場で働いているのか？それは、その犯罪で捕まり、刑務所でお勤めした後、この現場に流れてきたと言うことです。

えらく引っ張って申し訳ありませんが、その犯罪とは・・・高速艇の人だったのです。ようやく繋がってきましたが、高速艇とは、簡単に言うと「めちゃくちゃ速い船」です。何百馬力のエンジンを2、3機搭載し、漁船の数倍の速度で海上を飛ぶ（本当にほとんど飛びます）ことが出来る船です。もちろん海上保安庁の船もぶっちぎりです。なんでそんなに急ぐのか？もちろん逃げるためです。犯罪の内容はこうです。

ウニ、サザエ、アワビ、エビなどの高級な海産物を「密漁」するのです。漁師の方々が大切に育てたり、計画的に漁を行い守っている海の資源を根こそぎ奪って、闇で売りさばくのです。全ては夜の海で行われます。ササッと漁に出て、ゴソッと根こそぎ獲って、ピューと去るのです。見つかったとしても、高速艇で追っ手を振り切り逃げます。高速艇は、人気のない入り江に隠れています。そこには秘密のルートからしか行けません。そういう隠し場所を彼らはいくつか準備

しています。鳥羽さん達が、恐れているのは地元の漁師らしいです。今はどうか知りませんが、警察よりも漁師の方に捕まりたくないと言ってました。漁師も気の荒い連中もいるので、見つかりと殺されるケースもあるようです。

そういえば、私の知り合いも言ってましたが、漁師にも悪い人がいるようで、死体の処理をする漁師がいると聞いたことがあります。死体の処理とは、何らかの事情で人を殺めた場合、その漁師に頼むと漁に出たついでに、沖に死体を沈めてくれるらしい。潮の流れや船の航路など海を熟知しているので、海面に浮上し見つかることもないらしい。ちなみに処理費用は一体＝200万円以上するらしい。（20年前の相場＋又聞きなので信頼性はありません）

漁師さんの場合、大きくて重い死体を真夜中に運んでも不自然さがないから非常に都合が良いらしいです。大型のクーラーに死体を入れ、二人でヨイショ、ヨイショと船に運んでいるところを見られても、漁師さんは暗い内から良く働くね～と逆に感心されるだろう。究極のニッチなサイドビジネスと言える。

話は戻ります。鳥羽さんは、反省してました。もう密漁はしないと書いてました。しかし、鳥羽さんは本当に船が好きなのようです。高速艇の話をしている鳥羽さんの目はキラキラしていました。それは、子供が好きなオモチャを自慢している時の目でした。彼は密漁がしたいのではなく、「海のF1」に憧れていただけかもしれません。

「めっちゃ、はやいんやでえ～、とんでるでえ～、何百馬力のエンジン3機つんどるんやでえ～、たまらんわ～」・・・高速艇の解説はいつまでも続く・・・・・・・・・・。

助けたのは・・・

---

これは道路の夜間工事中の出来事です。今日も蒸し暑い夜だ。あまりに暑いので歩道に座り込みボケーとしていた。（俺は現場監督なので、ボケーとしていても、現場の人がしっかりしているので現場は進んでいくのです。）

突然、ガードマン（交通誘導員）のおっさんが、血相を変えて走ってきた。「監督、向こうで一人を二人がかりでやってる、あのままやったら、殺されてしまうワ」・・・と、嫌なこと聞いちゃったなあという思いが120%。いったい、俺にどうしろと言うのだ。スーパーマンの様に助けに行けと？へたれの俺の口から出た言葉が「おっさん、ガードマンやろ！あんたが、ガードしたらええんちゃうの？」・・・・・・・・

ガードマンは沈黙し、俺を見ている。ガードマンの真剣な目が事の重大さを表わしていた。「わかった、わかった、助けりゃいいんでしょ？」俺は根負けした。でも、この周辺は、治安が悪い。ヤクザ、チンピラも多く、外国人籍の人も多く住んでいる地域だ。どうする俺！

ガードマンが俺を現場まで案内する、もう近くにきたのか、ガードマンが俺にその先だ・・・と目で合図して戻っていった。逃げるなよと思いつつも、卑怯だが、出来るだけゆっくり歩いた。一刻も遅く現場に到着するためだ。事が終わってれば俺の身も安全だからだ。・・・しかし、残念ながら事は真っ最中だった。

道幅4mの裏通り、路駐している車と車の間の薄暗い中、2人の男が一人の男の「顔」だけをボコボコ殴っている。「ボスッ、ドスッ」と鈍い音がしている。しかし驚いたことに、殴られている男は立ったままである。両手で顔をガードしているが、2人の男達はアッパー、フック、後頭部など四方八方から滅多打ちにしている。殴られている男は意識があるようで小さい声で「まいった」と言っているが、男達は殴るのをやめない。ガードマンが俺に言ってきてから3分は確実に経っている。この男は本当に死ぬかと思った。・・・と思っている間にも4、5発殴られている。テレビドラマの様に顔面を殴られ、「ペッ」と血の混じった唾を吐く主人公・・・っといったシーンは現実には無い。顔面を一発でも本気で殴られると、一瞬で意識が飛び、戦闘体制が取れなくなる。それくらい、ケンカは怖いものです。

どうしよう？ここは治安の悪い地域だし、こいつらナイフやピストル持ってるかもしれんし、正直怖くて、怖くて、でも目の前の人死ぬかもしれない、その結果出た言葉が「お、おいっ」...と、びびりながらも大きな声が出せた。その声で二人は俺を方を見て殴るのをやめた。「やべっ、やられる！」と思った瞬間、二人は俺の横をすり抜け、逃げていった。「や、やったあ」意外な結末に、神様の存在を信じた。そうなりゃ、俺も調子に乗って「待てっ！」なんて叫んだりして、元気回復。「やったぞ！俺！えらいぞ！俺！」ちょっと追いかけてたりなんかして、そいつらが乗って逃げた車のナンバーもメモし、一仕事終えた充実感で現場に戻った。

現場には、殴られて、殴られて、殴られまくった人の顔があった。こんな顔があるのかと思うくらいの「もの」がそこにあった。例えると「むきタマゴ」。ツルンとした真っ赤なゆで卵のような顔だった。目は線一本だけ。鼻は無く、鼻の穴だけ二つ。口も線一本。パンパンに顔が膨らみ、しもやけの指みたいだ。そのおっさんは驚いたことにその姿で立っている。しゃべる事もできるようだ。おっさんは俺に「兄ちゃん、わし目え見えへんから、言う電話番号に電話してくれ」と言う。携帯電話の無い時代、公衆電話まで連れて行き、おっさんの言う電話番号を押した。

おっさん「おう、わしや、やられたんで迎えにきてくれ」・・・と、電話の相手に言っていた。公衆電話の明かりでそのおっさんの服装が見ることが出来た。靴が黄色、ズボンも黄色、上着も黄色、首には紋の入ったネックレスをぶら下げていた。「あれっ！おじさんは誰？」・・・。

紋の感じからして、その筋の人のようだ。歳は50過ぎか？派手な黄色づくしの服装が血まみれで、赤、黄と緑が加われば信号機だ。そんなくだらない冗談ごときでは、絶対に笑えないくらいの緊急事態であることは間違いない。

電話をしてから数分たった。っといっても5分も経たない内に、数十メートル先に、超ガニマタでママチャリに跨り鬼の形相でこっちに向かってくるおっさんが見えた。（鬼の形相は遠くからでも分ることが分った）近づくとつれ、そのおっさんの服装が見えた、白のズボンに黒のワイシャツで、その黒のワイシャツには赤のチョウチョが一杯飛んでいる。どこに売ってるのかと聞きたくなる。そのおっさんが、むきタマゴのおっさんを見て最初に言った言葉が「お前！なんも持ってなかったんか？」だ。まず、むきタマゴを見て驚けよ！俺はむきタマゴを見て、恐怖というのはこういうことか？と、これ以上の恐怖は無いと思うくらい怖かった。原形も分らないくらいの顔になっているのに、あまりにも冷たい言葉にがっかりだ。むきタマゴが「なんも持ってなかった」と答えたら、その次に言った言葉が「持っとけて、いつも言うてるやろ〜」だ。怒ってるし、もう期待はしません。・・・でその次の台詞は「誰にやられた？」だ。まだ心配することを忘れてます。仲間なら心配してやれよ！普通最初に「大丈夫か？」だろ！

やられた仲間の容体よりも、怒りで復讐のことしか考えていないようだ。って言うか「なにを持っていなければいけないのでしょうか？」多分、武器系だと思いますが・・・物騒なお話です。俺が、やった奴らの車のナンバーを控えたから警察に言ったら、すぐ捕えてくれるとメモを渡した。・・・「兄ちゃん、悪いなあ〜、クツソー、ぶっ殺してやる〜」俺「あのう、警察に言った方がいいですよ」・・・そんな俺の声は、チョウチョのおっさんには聞こえていないようだった。

そして、次の日、現場は大変なことになっていた。つづく・・・



事件の次の日、現場はヤクザだらけになっていたらしい。詳しくは後ほど。そして、俺は会社の寮で日中寝ていた（夜間工事のため、昼間は寝ています）、すると部屋のスピーカーを通して、寮長から「電話です」と呼び出された。俺「誰からですか？」寮長「友達やといってるが、名前は言わん、今寝てますと言ったら、起こせえ〜と怒鳴られたけど、何か巻き込まれたんか？」俺「わかりました、出ます」と電話が設置されている1Fに向かった。

電話に出た。電話の主は「チョウチョ」だった。チョウチョ「兄ちゃん、昨日は悪かったな、もう一回、やった奴らの背格好を詳しく教えてくれ」と言うことだった。詳しく教え、もう一回「警察に言った方がいいですよ」と言ったが返答が無いまま、電話は切れた。

（ちなみに、むきタマゴがヤクザとは知らず、被害の目撃者として証言できるからと、むきタマゴには俺の名刺を渡してしまっていた。）

そして、現場が何故、ヤクザだらけになったのか？むきタマゴのおっさんは、かなりの幹部だったようで、組を挙げての犯人探しが始まったようだ。かなりの人通りがあるにも係わらず、信号待ちしている人々に「昨日の夜、この辺でケンカがあったんやけど、知らんか？」と通行する人ほぼ全員に聞き込みを行っていたようだ。最終的には、ヤクザが私服警官にも同じ質問をしまい、警察手帳を見せられて、その場で解散させられたらしい。昼間工事担当の者から報告があった。

再び夜間工事。昨日の事件の余韻が残っている。今日は平和であって欲しい。今日も同じように暑い。いつもの様に、歩道に座り、ボケーとしていた。すると他の車と明らかに違うゆっくりとした速度で一台の車が近づいてきた。「奴らの車だ！」「犯人の二人が乗っている！」俺が「あっ」という表情をしたのに気づいたのか、交差点のど真ん中で、キキキキッとタイヤを鳴らしてUターンし逃げていった。

犯人は現場に戻るといのは、ホントなんだなあと思った。奴らは大事になっていないか確認のために現場に来たのだろう。昨日の今日に現場確認に来ると言うことは、この近辺の奴らなんだろうなあ〜と思うとかわいそうになってきた。車の車種、ナンバー全て控えてたので、昼間のヤクザの本気ぶりからすると、見つかるのは時間の問題だろう。ここからは、車で10分も走れば大阪湾に出る。かなりの確立で大阪湾の一部になるであろう。もし、本当にそうなったとしたら、俺もその片棒を担いだことになる。もう少し強めに「警察に言った方がいい」というべきだった・・・と悔やんだりもする。というよりも、俺がメモを警察に渡してれば、奴らはヤクザより先に警察に捕まって、命は助かったかもしれない。・・・でも被害届も出ていないケンカで警察が動くのか？色々考えてしまったが、自業自得という言葉が頭に浮かんでくる。

思い出してみると、奴らの暴力は尋常ではなかった。明らかに殺意が感じられた。ボクシング

の試合でも見たことの無い人の顔がそこにはあった。不謹慎かもしれないが、世の中には本当の悪がある。善良な市民がその餌食になることもある。その悪が奴らだとしたら、この世から無くなったほうが良いかもしれない。・・・と思っても良いですか？

## 賭博へGO！

---

賭博、そう、日本では禁じられているバクチです。競輪、競艇、競馬、オートレースは公的ギャンブルで認められています、ラスベガスにある様なバクチは禁じられていることは、皆さんもご存知だと思います。

でも、バクチはひそかに行われています。たまにニュースで「バカラ賭博容疑で捜査」とかいうのを見るが、みつかっちゃったのネ（涙）という表現が正しいと言えるほど実際はアチコチで行われている。・・・と思います。

先に言っておきますが、私はやっていません。現場の鉄筋屋の社長が自分が通っている賭博場について事細かく教えてくれたので、皆さんにもご紹介したいと思います。決して今後の生活に役立つ情報ではありませんが、こんな世界もあるんだなあ～という感覚で読んでみてください。

その日、俺は鉄筋屋の社長と宝くじの話をしていました。独身時代の俺はジャンボ宝くじをいつも奮発して33枚買っていた。つまり9,900円分も買っていた。それを自慢っぽく社長に言ったところ、社長には「そんなんで当るわけないやろ！」と言われてしまった。社長によると「少なすぎる」らしい。その社長はいつも20～30万円分の宝くじを買い、それだけ買うと「それなりに当る」らしい、それで、宝くじ専用の「銀行口座」を作っており、だんだんと増えているとのことだった。

やはり、お金持ちにお金が集まる仕組みがあるんだなあと思っていると、その社長はもっとすごい金の賭け方があるぞ！と・・・

一晩で300万くらい使うらしい。当然勝てば数百万儲かるらしい。それは犯罪らしい。通常、素人では参加できないらしい。らしい。らしい。

まず、賭博場まで行くのに、かなり手間がかかるらしい。そして、賭博場の場所は、頻繁に変わる。いつも同じ場所で行っていると、警察に見つかる確立が高くなるからだ。怪しい動きがあるとその日のバクチは中止になったりするらしい。それくらい、慎重かつ厳重な警戒の元、開催されているようだ。

場所は、繁華街のビルの一室などだが、その場所に行くには、いくつかの関所のようなものがあるようです。最初にどここの場所に男が立っているから話し掛けろと言われる。その男に「合言葉」を言うと、その男が「どこどこへ行け」と指示してくる。いわれる場所に行くと別の男が立っていて、その男に前の男から聞いた「合言葉」を言う。それを何回か繰り返して、進んでいくと、その日の賭博場に辿り着けるらしい。その間に不審な行動などがあれば、辿り着けないし、その日のバクチも中止になることもある。なんだかワクワクする仕組みだ。演出としては最高級級の演出の様に感じる。最高にいけないことをするという「悪い子魂」がムクムクと起きて来て泥沼にはまること間違いなし的風味が120%だ。

その社長は毎回、カバンに300万円程度を入れ、バクチに挑んでいる。今思えば、バブル絶

頂だった。土建屋の親父は、皆「日産 シーマ」に乗っていたし、豪華客船貸切、運動会ではスタジアム貸切、豪華抽選会の一等は海外旅行など、周囲の土建屋の社長は皆「ロレックス」をしていた。キラキラ光って時間が分らない時計が多かった。当時の俺の給料は、手取り12万円くらいだったか？（残業込みです）そんな中、6万円の革ジャンを買ったという記憶がある。しかも、数日後には半額セールが始まると言うことを知っているにもかかわらず、高くても買っちゃえという思い切りの良さ（これがバブル）があった。もうそんな時代は来ないことは分かっている。俺のバブルはその革ジャンくらいかな！

タイムマシンがあったら、6万円の革ジャンを買わないようにしたい。結局、フリマで2,000円で売ることになるのだから・・・。

もめごと。

---

その日、現場で、ある業者が言うことを聞かなかった。しかし、事を荒立てずに我慢した。何故我慢したか？それはその業者の上は「ヤクザ」だからだ。この辺を縄張りとしている「ヤクザ」の業者を使っていれば、現場は丸く治まるという暗黙の配慮がある。（大人の世界のルール）

そのことを俺の上司に報告した。上司である現場所長は、「また、そんなことがあったら、業者代えるぞっ！って言ってやれ！」といったので俺「ホントにそう言っているんですか？」と確認した。所長「ええわ、言うてやれ！」とのことだった。

別の日、早速その業者は言うことを聞かなかったので、所長の指示通り「言うこと聞けへんのやったら、業者代えるぞ！」とやってやった。「ざまあみろだ。」・・・業者は怒っていた。次の日、現場に一本の電話があった。電話の対応をしていた事務所の女の子が半泣きになっている。「〇〇さん（俺の名前）、怖い人から電話です。〇〇を出せ！って言ってます」俺「いないって言ってくれ！」女の子「すごい怒鳴ってます。怖いんです。」・・・この時点で女の子は完全に泣いていました。女の子が泣いた事と、俺がいないということもあり、（居留守ですが、）電話を切ることができた。女の子は怖いのと、俺のことを心配するあまり、涙が溢れた様だ。「カワイイ奴め！」・・・と言っている場合ではない。相手はヤクザだ。しかも親分直々に俺を名指しで、お電話を頂戴し、完璧に怒らせたようで、非常にまずい状況です。

すぐ、現場所長に報告！所長いわく「わしは知らん、〇〇君（俺のこと）指名で電話きとるんやから・・・」と完全に逃げられた。まずい、非常にまずい。やられるかもしれん。その日から俺は帰宅ルートを変更しながら帰った。同じルートで帰っていると待ち伏せされているかもしれないからだ。・・・幸いなことに襲われるということにはなかった。

しかし、ある日の朝、現場事務所の出入り口のフェンスに外車が突っ込んでいた。乗っている人はいなかった。現場所長に俺は「なんですか？あれは？」と聞いたところ、所長「あの車って、新車でいくらするのか調べてくれ」とだけ言われた。俺はヤナセに行き、調べた。確か「キャデラック セビル」とかいう車だったと思う。新車で500万円だったと思う。いつの間にか突っ込んだ車はなくなり、何事も無かったように現場は進んだ。・・・ったく、大人の社会は良く分らない。

## アメリカの空

---

突然ですが、俺は、アメリカでヘリコプターを操縦していた。本当に突然で驚いたと思いますが、本当の話です。目的の飛行場に近づいた時、前方に2機の小型飛行機が見えた。よくその飛行機を見てみると、レシプロ機（ジェットエンジンではなく、車と同様のピストン式エンジン）で、第2次世界大戦で活躍していたと思われる「戦闘機」だった。2機はドッグファイト（戦闘機同士の空中戦）を行っていた。1機がもう1機の後ろについて、つかれている方は必死で振り切ろうとしている。

時は、1990年ぐらいだったか、戦後から45年経過している。間違いなく戦争状態ではないので、遊びで戦闘機を使って遊んでいる様だ。なんという、スケールの遊びだろう。日本ではまず考えられない。戦闘機を持つだけでもすごいが、現実に飛ばし、戦争ごっこまでやっている。地上でのサバイバルゲーム程度なら分るが、本物の戦闘機まで使って遊ぶとは、恐るべし「アメリカ」・・・遊びの本気度が違う。

飛行場に無線を入れる。ちなみにアメリカには、ものすごくたくさんの空港があり、田舎の方には管制塔の無い空港が多い、そういう空港に着陸する場合は、一方送信（無人空港の場合、誰も聞いていない）で「今から着陸しますから～」と指定の周波数で自己申告してから着陸するルールがある。俺の無線が聞こえた様で、2機は着陸コース上から一度外れた。そのタイミングで一度着陸し、すぐ再び飛び立った。特に目的も無く飛んでいたのも、2機の邪魔にならないように今日は早く帰ろう。（なんと贅沢なと思われそうですが、その時は飛行時間が必要だったので、一人でプラプラ飛んでいました。・・・やっぱり贅沢だ。）

ある日も、一人でプラプラ飛んでいるとき、前方に雲があった。ヘリコプターは旅客機とは異なり、基本的に有視界飛行（目で見て飛ぶ。自動操縦や計器飛行は行わない）なので、雲に入てはいけない。・・・いけないと言われれば、やりたくなるのが人間です。雲に入ると当然、前方どころかどこもかしこも見えなくなる。・・・のは間違いないのであろう。やっちゃいけないのは分っていますが、体験したくなってしまう。もしかしたら、雲の中の「雷様（高木ブー）」にぶつかるかもしれないし、雲を抜けたらすぐ、別の航空機や山が前方にあるかもしれない。・・・と思って迷っている間に雲に入ってしまった。（これは最悪の判断っていうか、無能の極みです）

何も見えない。急に止まっているような感覚が身を包む。見える範囲が全て真っ白なので、進んでいるのか？上昇、下降どっち？全く分からない状況になった。ヘリの音だけが聞こえる。あとは「？」です。「真っ白な雲に私、包まれてるう～」この状況を「ホワイトアウト」と言います。厳密に言うと完全緊急事態発生です。なってはいけない状況になってしまいました。教官にはこの状況になったら「END」です。と教えられていました。まさに、今「END」です。時間にして、数秒、1分も無かったはずですが、ものすごく長く感じ、「死」の予感がしました。

結局、何もせずそのまま直進していたところ、雲を抜けたので助かりました。もう絶対に雲には入らない。・・・と誓いました。

ちなみに、ヘリの操縦免許のために、アメリカと日本で訓練を受けましたが、日本の空よりもアメリカの空は自由な雰囲気があり、航空機は身近な乗り物という感じがします。アメリカでは飛行機やヘリコプターは日本の様に特別な乗り物ではありません。自家用で持っている人も多く、趣味や仕事で使っている人も多い。近所ですごい古いヘリをもっている農場のおじさんは、「いあや～この間、墜落しちゃって・・・」と喋って、適当に見つけた同メーカーのローター（プロペラ）付けたら、直ったとか言って、自分で直してるし。（日本ではそんなこと絶対できないし、自転車を直すんじゃないんだから、ねえ？）つまり、自己責任の社会なのだ。

アメリカでの空の体験は、非常に貴重なものとなり、俺の人生に大きく影響しました。どう影響したのは良く分かりませんが、間違いなくいい影響を受けたと言えます。そんな貴重な体験をここから紹介していきます。

## アメリカンジョーク

---

今日は、隣にアメリカ人の教官のJが乗っている、彼は俺よりも少し年上で30歳ちょいだったと思う。強面で一番厳しい教官と言われていたが、なぜか俺とは「馬」が会い、周りからは、あんなに穏やかなJは見たことがないと言われるほど仲良くやっていた。彼は髭面で、ごつく、あまりしゃべらない。風貌から敬遠されるタイプなのは間違いなかった。今から考えれば、Jもまだ若く、しゃべりも達者でないので、「怖く」見えただけで、見た目が怖いだけのおとなしい青年だったように感じる。

そんな彼は、俺の訓練の時には色々工夫をしてくれ、他の教官が行っていない教習方法で楽しませてくれた。まず、訓練初日は好きなように操縦して良いと言われた。（この時俺はヘリコプター自体に初めて乗った）当然、操縦は出来ない。このレバーを前にすると前進する程度しか知らない。Jが最初操縦し、ある程度の高さまで上がった。（ある程度高度があると変になっても対処できるからです。）そこで、「YOU HAVE（あなたが操縦しなさい）」で操縦が変わった。

でわでわ、これを前に・・・「グイ」っな。寸法で言うと10センチくらい前に操縦桿を傾けた。

・・・するとどうでしょう。（ビフォーアフター風に）Jが操縦していた時は機体はほぼ水平に保たれていましたが、機体は真逆さまに下を向き、墜落姿勢に！すかさずJがリカバリー。

「あーびっくりした」ひっくり返ると思った。・・・実はこれは恒例の儀式のようなもので、初めて操縦させたらどうなるかを他の教官や訓練生が地上から見て楽しむもので、ひどい状態になればなるほど地上で皆が盛り上がるという、悪質ないたずらであった。そのいたずらから無事に帰還した俺は、皆から褒められた。「良かった」「楽しめた」「本当に墜落寸前だった」「過去最高の高角度だった」「真下を向いたのは初めてだ」とお褒めのお言葉を頂戴できた。内容はどうあれ、他人から褒められるのは嬉しいものだ。

今から思えば、ヘリの操縦桿は非常にデリケートで、特に訓練で使用する小型の機体の操縦桿は少し動かすだけで、姿勢が変わり、大型ヘリに慣れているベテランでも突然乗ったら、操縦できないくらい微妙な操縦桿さばきが必要とされる。・・・らしい。（大型ヘリには乗ったことが無いのでベテラン操縦士の話です）

それを急に10センチも「ガバッ」を動かすと、当然、真下を向きます。無知とは恐ろしいもので、そんな危険な操作も平気で行ってしまったわけです。何事も最初はソフトタッチでね！

この日は教官のJと遠出する。Jはいいところに連れて行ってやると言っている。アメリカのしかもド田舎の情報は全く持ち合わせていないので、言われるがままヘリを操縦していた。かなり高い高度を飛んでいる。周辺は雪山だ。Jが前方を指差した。指の先には山の頂上があった。その山の頂上は、絵に描いたような山の頂上で先がとんがっている。Jはその山の頂上に着陸しろと言っている。一度頂上を中心に旋回してみる、これは安全確認のためだ。風の方角も確認しなければ着陸出来ない。頂上は本当に狭く、数m角しかない。ヘリ1機降りられるくらいのスペースしかない上に雪が積もっている。

まさにピンポイント着陸で少しのズレも許されない。着陸角度を一定に保ちながら狭いところに着陸するための訓練だ。緊張しながらもスムーズに着陸姿勢を維持することが出来たが、ヘリが接地する瞬間だけは、Jはヘリのドアを開け、雪にヘリのスキッド（足）がどれくらいめり込むかを見ながら、手でゆっくりと下げろ、下げろとサインをしホローしてくれた。着陸完了。パワーを落とし、少し休憩。数m横は断崖絶壁だ。狭いので降りて歩くことも出来ない。本当にとんがった山頂にヘリ1機が着陸している状況だ。実は、着陸よりもエキサイティングなのは離陸だ。あんまり長居すると雪にめり込んだスキッドが凍りつき離陸できなくなるので、数分で離陸しなければならない。数m前は何も無いので、飛び降りるような感覚で離陸することになる。プールのジャンプ台の先端から飛び込むような感じだ。「イヤッホー」と言いたくなるが、半分ビビっているのでもうそこまでは出来ない。（日本じゃ絶対出来ないだろうなあ、こんなこと）

無事、ミッション終了（みっちよんではない）。その帰り道（帰り空？）タイトルにあるようなおとぎの世界を体験することになる。天候は少し雨が降っていた。霧雨のような状況だったと思う。そして、太陽は出ていた。飛行している前方に丸い円形の「虹」が現われた。地上では半円に見える虹が上空に出来ると円形に見えるようだ。その円形の虹にヘリは少しずつ近づいて行き、とうとう円形の虹の中をくぐったのだ。近づくと虹は薄く見えたが、確実に虹のサークルの中をヘリはくぐり抜けたのです。Jと二人で「オオッー」と興奮した。もしかしたら、俺達はこの瞬間に死んでしまっているのではと錯覚したほど、現世とは思えない神聖さを身に感じると共に、思いがけない神様からのプレゼントを頂いたような、感謝の気持ちと何となく得したような気持ちで一杯になり・・・皆さんこの気持ちを察してください。うまく表現できません。とにかく感動しました。

そして、いつもの空港に戻り、格納庫に運ばれる機体を見て我々だけではなく、格納庫の職員も全員驚いた。なんと、なんと～機体が・・・機体が・・・七色に輝いており、Jのトレードマークのサングラスも七色に変色している・・・・・・・・・・・・・・・・・・はずも無く。その日の訓練を終えた。（お騒がせいたしました）



「かたかたっ」・・・たまたま休みをもらっていたその日、私はある事務所にいて、小さな揺れを感じて、事務所の天井辺りを見ていた。壁に掛けられた絵が大きく揺れ始めた、一緒にいた人と「長い！大きいか？」と言っている内に大きく揺れ始めた。尋常じゃないくらいに揺れ始めたので、外に出ようとしたが、電柱がかなり揺れ電線が「ビュンビュン」と音を立てている。駐車している車が左右に揺れているというか、飛び跳ねているようだった。外も危ないと感じ、出入り口で躊躇していた。事務所の女の人は棚の上のテレビを押さえている。何十とある小さな引き出しから書類が飛び出し、床は書類だらけ・・・と思っているときもまだ揺れている。いつ治まるんだ。・・・長かった。こんなに揺れた地震は体験したことが無い。来るか？と言われていた宮城県沖地震か！道路に出てみると、信号が消えている。車も止まっている。近所の人達が恐る恐る外に出てきた。事務所の女の人が、近所の一人暮らしの老人の様子を見て来るっと小走りで向かった。なんて良い人なんだ。こんなときに他人の事まで気が回るなんて！

周囲の建物には被害は無いようだった。「津波が来る！」とそう感じた。ここは海岸線から数キロ内陸だから大丈夫だろうとは思ったが、念のために高台にある自宅に戻った方が良かったと思った、事務所の人に「津波が来ますから」と言い残し、車で自宅に向かった。自宅に戻る途中、渋滞に少しはまったが、裏道を通って何とか自宅に着いた。近所の人達が広場に非難していた。その時、遠くで「ドーン、ドーン」と2回爆発音が聞こえた。その時はなんだか分らなかったが、TVのニュースで石油コンビナートの爆発だと分った。高台からコンビナートの方を見ると黒い煙が高々と上がっていた。煙が3箇所から上がっている。コンビナートと仙台空港あたりからも煙が上がっている。その後、TVで信じられないくらいの恐ろしい映像を見ることになる。

自分が普段通っている道や場所が津波に飲み込まれていく映像。仕事の関係でお世話になった気仙沼市、南三陸町の役場、旅館、消防署など破壊されていた。2年前、三陸沿岸の津波に対する防災意識の高さを取材したことがあり、昭和の三陸津波の体験者のお話も聞いた。泊まった旅館には、その際の津波がこの高さまで来たと旅館内に表示されていた。・・・しかし今回の津波は、その旅館自体も簡単に押し流し、町を壊滅状態にしてしまった。

実は、これを書いているのは津波から2週間経っているが、いまだに涙が出る。歳をとってから涙腺が弱っていることもあるが、毎日涙している。新聞を読んでは泣き。TVのニュースを見ては泣く。恥ずかしいことに今日は地下鉄の中で涙してしまった。家族も自宅も無事だったが、あまりの状況に涙してしまう。実は車で10分も走ればTVで見る場所に入ってしまうが、まだ行けない。自分の目で見てみたいとは思いますが、被害にあった人のことを考えると、現地に行く心構えが分からない。住んでいる場所が違うだけで生死が分かれた。そんな差で死ぬ人、生きる人に分かれるという現実が受け止められない。

実は大学の先生から1000年に一度の地震が宮城県沖と同時に起きるかもしれないと・・・

と聞いていた。そのため我家ではミネラルウォーターと非常食は備蓄していた。そのお陰で我家はかなり助かったものの、食料品や燃料がまだまだ不足している日常。おまけに原発問題。私より大変な暮らしを強いられている避難所の人々が大勢います。あまりにも恐ろしい現実は、本当に現実なのか？いまだに信じられない。

## 被災地に入った

---

とうとう業務で現地に入らざるを得ない状況になった。実は以前から業務があったものの、今まで何となく避けていた。現場スタッフのお手伝いをしなければいけない状況になってきた。しかし未だにどういう心構えでいけば良いのか分らない。いつもは結構いい加減で、大胆で、すぐ行動する方なのに今回は、いつもとは違う。

業務は三陸沿岸～福島の被害状況と復旧状況を映像で記録するというものだ。私が入ったときは、震災から2週間ほど経っていたので、道路の瓦礫は車が通れるくらい開いており、寸断された道路も迂回路や仮設の橋が架けられ、緊急車両の許可証と災害記録班の指定を役所から支給されていたので、どこへでも入れた。しかし、以前はガソリンも食料も現地では調達できないので、ガソリン予備と食料を持ち込んで、スタッフ達は泊まるどころもなく避難所の駐車場での車中泊で頑張っていた。業務としては過酷だが、被災地の方々や被災地のために頑張っている自衛隊その他団体の方々の苦労を考えると不満など言える立場ではない。

TVで見た光景が視界一杯に広がっている、本当に言葉が出ない、酷い、神様がいるとしたら何故、こんなことが起きるのか、亡くなった人々は何か悪いことをしたと言うのか？子供もたくさん亡くなっている。それを考えると、「なぜ」という言葉が頭に一杯浮かんでくる。何もここまですることはないだろうと思うくらいの景色が一面にある。写真やぬいぐるみ、生活感のある品々があちこちに散らばっている。誰かがイスにぬいぐるみを座らせている。地面に転がっているぬいぐるみがかわいそうに思えたのだろう。津波に一面流された荒野に向かって、一人のお坊さんがお経を唱えている。悲惨な現地でちょっとした人のやさしさが見える。一人一人出来ることからしている、そんな風を感じた。

以前お世話になった役所と消防署は形はあったが、形がある程度で何もかもめちゃくちゃになっている。海岸線からはかなり離れているが、横に川が流れているため川から津波が襲ったのだろう。私がお気に入りだった民宿兼食堂をやっていたお店は家の基礎だけになっていた。店の女将さんは助かったのだろうか？釣りをした所、あの交差点、お店など、場所の特定が出来ない。全て平地になっているので、目印となるものがないと本当にあの場所なのか？・・・となる。

もういい、もう見なくていい。最近そう思う。悲惨な状況を見ても最近は何も感じなくなってきた自分があることに気づいた。感覚がおかしくなってきた。目の前の状況が一枚の絵や写真の様に感じ、その奥にある亡くなった人の無念さや助かった人達の悲しみや苦労などを考えないでいる自分や周囲の人達の感覚が怖くなってきた。自分は、非常識で本当に愚かな人間なのではないのだろうかと思う。被災地の中を車で通りながら雑談し笑っていた時もある。昼間、撮影して家に帰る。電気がつく家で、暖かい食事をし、シャワーを浴び（湯船は週一にしている）、暖かいふとんで寝る。昼間は避難所で取材も行っている。そのギャップが許されるのか？避難所の人は大変だと言っているが、家では平然と快適な生活を送っている。人間的に未熟

なので気持ちのコントロールが出来ていないだけかもしれないが、他人事に様に考えている自分が嫌になってきた。・・・でボランティアに参加してみた。動機がおかしい。純粹に被災者のためにではなく、自分を納得させるために、参加したボランティアだ。自己満足型というたちの悪い方だ。そうして誤魔化し帳尻を合わせたい心理がある。情けないやら、悲しいやら。

この2週間は被災地に入りっぱなしで、毎日見ていると、本当におかしくなってくる。あまり考えると帳尻が合わなくなってくるので、最近はあまり考えないようにしている。テレビなど言われている「やれることをやって行こう」「前に進もう」・・・的なプラス思考でやっていけばいいなと思う。

震災から3ヶ月経った。仕事で気仙沼市、南三陸町に行った。以前よりは大分と片付いており、瓦礫処理をしてくれている人々の力強さを感じる。木材はあまり残っておらず、金属類の山がアチコチに出来ていた。分別しているようだ。しかし、建物の屋上に取り残された車や陸上の船舶はまだそのままである。

この日は、とてもいい天気で海の水は青くきれいで、小さな魚も見える。（この魚は津波のときどこに避難していたのだろう、そんな疑問も出てくる）この美しい海が、私の後ろにある町を壊滅状態にしたのだ。同じ海とは思えない。目の前の建物は4階建てだが、4階のバルコニーに海で使用されていたであろう「網」が絡まっている。あの高さまで津波が襲ったとは、信じられない。

復旧工事はかなり進んでいる。流された橋の代わりに震災直後すぐ、自衛隊の応急架橋が架けられ、復旧作業の車両が行き来できるようになった。更にその横には新しい橋が建設されている。自衛隊、国土交通省の早い対応に頭が下がる。今回の災害では、日ごろ何かと叩かれている公務員の頑張りが際立っている。警察、消防、役場の人々など本当に頭が下がる。今、宮城県内には他府県ナンバーの車両がたくさん走っている。私の子供達は、遠い他府県ナンバーに高いポイントをつけ、点数をつけて遊んでいる。日本全国から応援に来てくれている。先日、大量のパトカーが連なって走っていたのだが、ナンバーを見ると京都、奈良、多摩など他府県ナンバーばかりだったので、感動し泣いてしまった。涙で前が見えず、パトカーにオカマを掘るところだった。ありがとう、敬礼！

それに比べ、国会議員の先生方は、・・・・・・・・・・言葉にもしたくありません。小学生以下の知能しかないようです。いろんな意見があると思いますが、国会はいじめの構図、日本の衰退を表しています。批判、人を責めるだけで自ら行動しない。批判家は誰でもなれます。私も国会議員になれると思います。私の方が数百倍優秀だと確信します。菅さん降ろしが最重要項目のようなので、人をけなすのが先生達のお仕事のようなのです。もっとレベルの高い人たちだと思っていましたが残念でなりません。世界中の笑いものです。日本国民も怒るときが来たようです。

すみません、タイトルは「原発」でした。原発に関する話を最後に少しします。この前、原発の近くまで行った。明日も行く予定ですが・・・。防護服を着た人達が車に乗って移動しているシーンは異様な光景だ。原発周辺には大型トラックが行き交い、水槽みたいなものを運んでいた。20kmの地点では、マスクもせず談笑するトラックの運転手達が大勢いた。思っていた以上の大勢の人達が働いている。放射線の数値は高いはずですが、マスクをするのが面倒なのか？諦めているのか？数年後にその答えが出ると思うと怖くなる。

福島市、郡山市の子供達はほとんどマスクをしている。学校によれば100人規模で転向児童が出ているらしい。疎開しているわけだ。しかし大人たちは普通に働き、生活をしている。福島県では本当に危機管理を各自行わなければならない状況にある。今どう行動し、将来どう影響するかを考えなければならない。国の支持にしたがっていると「遅い」状態になってしまうかもしれない。少し前までは、私も何時原発が爆発しても逃げられるだけの燃料を常に確保しようとしていたが、今はもうそれを行っていない。何だか面倒でバカバカしいからやめてしまいました。原発よりもAKB総選挙の新聞記事に注目したりしてました。こうやって原発問題をなんとなくやり過ごし、気が付いた時には大変な状況になっていた。・・・というパターンが濃厚です。

## 複雑な気持ち

---

震災から9ヶ月が経った。約半年間何も書かなかったが、色々な事があった。陸前高田市では、震度5にみまわれ、津波注意報の中、高台に逃げたが、その際の地元の警察と消防の迅速な対応や住民の方々の危機感一杯の避難の様子は、平和ボケした私の意識を考え直す機会にもなった。生と死は身近にある。中途半端な危機感は命とりなる。そんな言葉を思い浮かばせるようだった。これからは真剣に生きていきたい。無念の中、命を落とした方々に恥じないように。

南三陸町では、深夜の自衛隊の作業の撮影を行っていたとき、不審な大型車2台が100mほど手前で止まりこちらの様子を伺っている。なんだろうと思い近づいていったところ、向きを変えて猛スピードで内陸側に走っていった。最近出没する金属泥棒だろう。・・・などなど悪い奴は、どんなときでもいるもんだ。

思えば、震災直後は、遺体から財布を抜く人。車からガソリンやアルミホイールを盗む人、一番許せないのは、津波がすぐ後ろに迫っているとき、渋滞のため歩道を走って逃げる人々を後ろから、何人も車で轢いて逃げた奴だ。目撃者によると、かなりの人が津波ではなく、車に轢かれて死んだようだ。信じられないが現実である。

ある程度、落ち着いてからは、保険金で潤った人が高級品や贅沢品を買い込み、全財産を失った人もいれば、被害もあまりない中、多額の保険金で豪遊する人もいたりする。何なんだろうかこの差は！仙台の繁華街「国分町」は活気に溢れている。もちろん、あぶく銭の人ばかりではない、他府県から被災地復興のために来てくれている方々もお金を落として行ってくれる。ちなみに、週末のキャバクラは、待ち時間が出るくらいだ。

なんだか言っていて、人間は苦しみ、もがきながらも、知らない内に忘れ、いつもの生活に戻る・・・そういう人もいれば、一生震災を背負って生きていかなければならない方々も大勢いることを忘れてはならない。震災孤児は1,500人いると言われている。片親になった子供も大勢いる。その子達のこれからの生活は、想像を絶するものになるだろう、その子達のために生きている私達はすることがあると思う。思うだけではいけない。行動しなければと思う今日である。

震災については、ここで終わりにしようと思います。これを読んで下さった方々は、被災地のことを忘れずにいてもらえればと思っております。現地は、ガレキは片付けられていますが、何もありません。更地の状況です。防風林もなくなったため、冬場は風が吹きさらし砂が舞い砂漠のようです。しかし、街灯がついたり、自動販売機が設置されたりして、以前の夜は全くの闇でしたが、人間社会の証が現れてきています。

福島、宮城、岩手の被災地のために、何かしてもらえればありがたいです。私も被害が大きかった人のために何か役にたてればと思います。